

#### IV. 開発テキストの試行による成果と課題

## 第1章 本調査研究の成果と課題

### 1 テキスト開発における基本構想

第I部第1章で既述の通り、テキスト開発における基本構想について確認しておく。

平成17年2月にマネジメント研修カリキュラム等開発会議が開発した学校組織マネジメントテキスト（以下、「現行テキスト」）により、特に校長、教頭等管理職研修への組織マネジメントに基づく発想の浸透は進んでいると言える。現行テキストの基本姿勢は、①組織として「共通目標（学校教育目標）」を持つこと、②「現状」を把握すること、③ヒト・モノ・金・情報・時間等の資源を有効に活用し方策を立てるというものである。しかし、多くの学校において、「学校教育目標」は年度当初に校長が教職員に対して提示するものであり、教職員、児童・生徒、地域・保護者と共有されているとは言い難く、形骸化している学校も少なくない。また、「現状」を把握するという視点は、認識の深まりは見られるものの、「学校関係者（児童・生徒、保護者等）の声に耳を傾ける」「地域に出向く」といった行動にとどまっており、定量的データなどの客観的データに基づいた「現状」を把握する手段を用いる実践は皆無に等しい。さらに、ヒト・モノ・金・情報・時間等の資源を有効に活用し方策を立てるという姿勢は、学校運営協議会や学校支援地域本部事業などの地域資源を活用することができるメニューが増えているにもかかわらず、活用して「学校教育目標」に迫るまで至っていない。これらの課題に対応し、学校教育現場に活かすために、現状把握の対象と方法を理解できるテキスト（以下、「新テキスト」）を作成する必要がある。

本研究は、現行テキストを否定するものではなく、基本姿勢を見直し、新たな視点を採用するものである。つまり、上記①～③の順序性に着目し、内容等を吟味した上で、より充実に資するテキストを作成し、学校管理職の組織運営能力を向上させるプログラムを開発するものである。具体的なコンセプトは以下の3点である。

○理念の浸透を図るマネジメントテキスト

○情報を収集・分析する能力、組織の在り方や方法を確立するマネジメントテキスト

○教育資源を活用するマネジメントテキスト

つまり、現行テキストでは、①→②→③の順序性を有していたものを、本研究では、②→①→③というマネジメントテキストを開発し、試行することで、これまでのマネジメントテキストで到達できなかった段階へ近づこうと試みるものである。

以上の基本構想において、昨年度は、「情報収集」の理解の深化と「情報収集」の方法の獲得を促すためのテキスト（モデルケース含む）を開発し、2自治体での試行（講義・演習）を行った。そして、今年度は、昨年度の成果と課題を踏まえ、収集した情報の「分析」と具体的な施策の「構想」の方法の獲得を促すための研究（テキスト開発、3自治体での試行：講義・演習）に取り組んできた。

### 2 テキストの内容

第II部第1章で既述の通り、本研究では、ケースメソッドによる演習題材としてのモデルケース（本文、補助資料、ワークシート）を開発した。具体的には、昨年度作成した「情報収集」テキストにおけるモデルケースをベースにして、今年度試行を行う「分析」及び「構想」に対応できるテキストとするために検討を行った。その過程で、モデルケースに

ついでにコンセプトを以下のように設定した。

- ①「情報収集」「分析」「構想」を通して使用できるモデルケースとする。
- ②モデルケースの情報を意図的に制限する。
- ③年度途中の着任とし、ケース本文に着任前後の状況の詳細を記載する。
- ④学校の「特色」と「問題」の対象を明確にする。
- ⑤校種に関わらず受講できる内容とする。

モデルケースの開発は、学校経営に関わっている（きた）実務家系メンバーが中心となり、研究会議だけでなくクラウド型コラボレーションツールを活用し、試行錯誤を経てなされた。この際、昨年度同様、今年度の研修も、受講者が他の参加者とのかかかわりや講師の指導を通して、「情報収集」「分析」「構想」段階において、自らの考え方の癖に気づき、新たな視点や考え方を主体的に獲得していくことを目指した。そこで、受講者の主体的なかかかわりを喚起するために、モデルケースで提示される情報を意図的に制限した。検討の結果、今年度、修正・追加を行った主な内容は以下の2点である。

- ・ケース本文に着任前後の動きを加え、自身が見取ったり、聞き取ったりした内容を記載する形式にした。

- ・「分析」の演習で必要と思われる学習指導に関する情報をその他資料として追加した。

また、「分析」「構想」のねらいを達成するために、昨年度開発した補助資料にいくつかの情報を加え、ワークシートを開発した（第Ⅱ部第1章及び巻末資料を参照）。

### 3 研修試行体制について

#### （1）研修試行者の概要

本研究メンバーである研修試行者（講師、補助者）は、教育行政学・学校経営学を主たる研究領域とする大学教員、都道府県、政令市及び中核市レベルの教育研修センター等の管理職研修担当職員、中学校の現職校長、現職事務職員と多彩である。これまでに、現行テキストを用いた講義・演習を企画、実施、受講してきた経験を持つ。また、教育研修センター等の管理職研修担当職員は、新テキストの試行を実現するための環境づくり（場、時間、協力者等）の点からも不可欠な存在であった。各メンバーは、将来的に新テキストが本格実施される時、各地域において研修指導者となっていくこと、さらには、各地域を超えて本テキストの浸透・推進役を担うことが期待されている。

各メンバーは、自身の経験に照らして、現行テキストがもたらす効果・成果とともに改善課題に関してそれぞれに見解を有していることから、新テキストの開発にあたっての有益な視点やアイデアの提供が期待された。実際、研究会議・試行時・試行後において、研究代表者の説明と問いかけを受けて、また、自ら問いを発する形で、直接あるいはクラウド型コラボレーションツールを活用しての率直かつ活発な意見交換や議論が展開された。このようなメンバー間の主体的・積極的な関わり合いによって、また、会議記録（板書内容含む）や気づきのメモ・コメントの蓄積・共有によって、新テキスト開発の基本姿勢が

メンバー間で共有されたと言える。特に、クラウド型コラボレーションツールの活用については、メンバーのコメントや提供資料やそれへの反応が瞬時に共有されるため、テキスト開発のみならず、研修試行のシミュレーションともなった。全国（宮崎～北海道）に分散するメンバーが一堂に会することが非常に難しい中で、比較的短期間で効果的に諸情報や研修試行イメージを共有し、研修試行の実践と振り返り・改善の質を高めるために、このツールは非常に有効であったと言える。

## （２） 研修試行における試行者（講師）の動き

次に、研修試行における試行者（講師）の動きについて述べたい。

研究メンバーが全国に分散するため、また、試行会場・試行日は協力教育委員会（下関市、長崎県、函館市）の計画に依存するため、各試行日に参集可能なメンバーによってチームは編成された。昨年度から引き続きメンバーである者もいるが、今年度から始めてメンバーになった者もいる。本研究に関する熟知度は決して一様ではない中、また、それまでの研究会議において直接顔を合わせたことがわずかな回数（1回の場合もある）でしかなかった。1会場のみの実施であった下関市は講師1名で対応したが、長崎県、函館市においては、3会場で実施された。1会場あたり講師1名及び補助者1名で試行した函館を例として、ここでいうチームのイメージを示すと、メイン講師と補助者との連携・協力に加え、会場間の連携・協力（責任）を臨機応変に遂行するというものである。事前に試行シミュレーションを行っていたとは言え、時間配分の変更、受講者の反応や質問などあまり想定していない事態が起こる可能性があったため、会場内・会場間で情報交換やサポート等を提供し合う必要があった。実際に、これらのやり取りは、演習中、休憩中を問わず臨機応変に行われた。今後、本テキストが実践されていくにあたって、講師自身がテキストの意味・意義を十分理解し、演習における予期せぬ事態に臨機応変に対応する見識やスキルを身に付ける必要があることは当然である。しかし、一方では、限られた時間の中で、演習がスムーズに実施され、受講者の学びの質を高めるためには、複数講師あるいは補助者から成るチームによる実施を基本とする必要がある。すなわち、講師陣がチームとして思考、情報交換、サポートし合うという一連の動きは、本テキストの効果を高めるための重要な要素と考える。

## （３） 受講者の参加特性

研修試行における受講者の参加特性は一様ではなかった。

下関市は、小・中学校の校長のうち任意研修であった。このうち、昨年度の「情報収集」を受講した者が数名含まれていた。

長崎県は、新任教頭（小・中・高・特別支援学校）と県立学校新任事務長・事務局長の悉皆研修であった。

函館市は、午前は、小・中学校の校長の悉皆研修であり、午後は、任意研修であった。

試行自治体それぞれの研修時間は一様でないことから、本年度のプログラム開発のメインである「分析」の前段階となる「情報収集」の受講状況も一様ではなかった。特に下関市においては、基本講義と「情報収集」を合わせて約1時間という時間設定であり、「情報収集」の理解度が必ずしも十分ではない状況での「分析」の実施となった。

これまでの章で既述されているように、「情報収集」の重要性に対する理解と認識を踏まえての「分析」というステップでプログラム構成がなされていることもあり、「分析」に臨む受講者の「情報収集」に関する理解度をはじめとした参加特性にバラつきがあった感はある。そうした条件が異なる「場」における研修は柔軟性を持って試行された。

#### 4 テキストの成果と課題

本年度のプログラム開発のメインである「分析」のテキストを用いた研修の効果と課題については、「Ⅲ. テキストの活用」で詳細に述べられているため、ここでは講師及び観察者として研修に関わった筆者（諏訪・川口）が看取した（既述内容との一部重複もあろうが）成果と課題を述べたい。

まず、成果について述べる。

第一に、受講者の認識枠組みやものの見方・考え方（視点）を客観化・相対化させたことである。受講者がこれまで得てきた知識や培ってきた経験はとても貴重なものであるが、そこでの認識枠組みやものの見方・考え方（視点）が時に、新たな発想等の出現を阻害する可能性もある。受講者は、テキストで語られる理論や言説に真摯に耳を傾け、個人演習のみならず他者との共同演習に主体的に取り組むことにより、新たな認識枠組みやものの見方・考え方（視点）を客観化・相対化させたものと考えられる。当然、「感じ方」「捉え方」は一樣ではないが、研修を通して、「もやもや感」や「違和感」を感じることができたならば、その気づきこそが、さらなる「学び」や「成長」の契機となるとも考えられる。

第二に、原因分析の具体的手法（ツール）の存在を理解させ、「使い方」を一定程度習得させたことである。第一で述べた「認識枠組みやものの見方・考え方（視点）を客観化・相対化」させることが自然発生的に生起することは難しい。そこには、自覚的かつ具体的な手法の採用が必要となる。今年度は、「分析」をメインテーマとして、その中でも、「原因分析」の具体的手法（ツール）の教授と演習を行ったわけだが、仮に、受講者がものごとを自身の経験や勘に照らして「頭の中だけ」で考える「習慣」が身体化しているとするならば、このツールには、そこに「揺らぎ」や「発想の転換」をもたらしたのではないか。そういった意味で、（昨年度同様に）今回のテキストが発するメッセージは、創造的な学校経営の実践にあたって、「管理職自らが思考するための具体的な技術やツールを獲得すること」の重要性であった。受講者は、そのメッセージを感じつつ、多種多様な手法がある中でその有効性に高い評価がなされている（今回採用した）手法の「使い方」を一定程度習得したものと考えられる。

次に、課題について述べる。なお、研修の運営方法等、実務的な点（反省点・具体例）の指摘については、各試行の報告にてそれぞれなされているので、そちらを参照されたい。ここでは、研修全体を通じた課題を述べておきたい。

第一は、研修のねらいを明確化させるための手立ての必要性である。本研修は、校長（リーダー）としての「応用力」を身に付けるためのステップの一つとして、「分析」の方法を学ぶというものであった。先述したように、各試行では、受講者の参加特性や研修日程が一樣ではなく、時間的な制約もあり、「校長とはいかなる存在か」「校長に求められる知識や力は何か」といった本研修（特に演習）の前提となる「講義」が必ずしも十分になされなかった。ただ、それは、「分析」の講義編及び演習中に講師が補足することで解消される

面もあろう。要は、同じ研修を受けても、ねらいの理解度のバラつきを縮減させるための具体的な手立てをいかに講じるかという点である。前記したように、「原因分析」の手法獲得は研修の主要目的であるが、「何のために」「何に活かすのか」という視点を常に有していなければ、単なる「作業」、それも「最善解」を求める「作業」となってしまう。具体的には、筆者（諏訪）が講師を担当した下関市では、演習前・中・後に、研修のねらいの周知・共有を十分に図ることができなかった。函館市の施行報告の最後に「指導者自身が、講義や演習を円滑に進めることに意識を集中するのではなく、研修を通して伝えるべき本質が伝えられるよう、全体を俯瞰する姿勢が重要である」との指摘があるように、講師自身が常に研修のねらいに依拠した実践を展開することこそが肝要であろう。

第二は、演習、テキスト（ケース本文、補助資料）、プレゼンテーション資料との連動性・連続性の課題である。前年度の「情報収集」の課題であったテキストを読み込む時間の確保は、研修時間の制約もあり、今年度の「分析」においても完全に解消されるには至らなかった。それ故、「仮説」としてツリーを作成し、テキストの情報から検証するという演習において、テキストの情報を読み取り、検証の根拠にするという活動が必ずしも十分に行われなかった面がある。下関市の試行においては、プレゼンテーション資料が投影だけであったため（文字サイズが小さいという課題もあいまって）、演習のねらい・流れ・方法の「分かりにくさ」を生じさせ、演習の停滞と混乱を招いた感は否めない。この点は、次の長崎県の試行から、プレゼンテーション資料を配布するということで受講者が常に演習の手順を手元で確認することが可能となり、改善を図ることができたことは一定の成果とも言える。ただし、先に指摘したような連動性や連続性の問題が克服されないと、部分的な方法・技術の習得で研修を終了してしまう可能性が依然として残る。

現在、学校教育において、ICT を活用した「反転授業」等のアクティブ・ラーニングの導入が進められている。管理職研修（あるいは教員研修）においても、テキスト及び講義学習を事前に済ませておくことを前提に、「受講者（学習者）が集う場」では、例えば、演習→理論補強→演習→理論補強といった環境の中で、能動的・主体的な学習活動時間を十分に確保する研修スタイルを開発していくことも重要ではないだろうか。

（諏訪 英広・川口 有美子）



## 第2章 今後の学校管理職マネジメントテキスト開発への示唆

### 1 学校管理職マネジメントテキスト開発の基本構想

本研究会がなぜ学校管理職マネジメントテキスト開発の調査研究を行ってきたか。その原点といえるのが、兵庫教育大学で平成24年度から27年度の3年間で行った文部科学省特別経費を受けての「教育行政幹部職員の能力育成モデルカリキュラムの開発」である。この調査研究と期を同じくして、国レベルでも教育委員会制度改革の議論が巻き起こり、平成27年4月、地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正され、教育委員長が廃止され、その権限と責任が教育長に統合された（新教育長）。また、教育長を首長が任命、罷免するシステムや、首長の主宰する総合教育会議等地域住民の意思に近づく教育行政の姿が制度化された。

一方、学校現場では度重なる新制度に呼応した制度改正の理解が進まず旧態依然とした学校運営がなされているのも現実である。年を追うごとに複雑化する学校現場のマネジメントも合わせて変革が求められている。

### 2 学校管理職マネジメントテキストのコンセプト

教育行政幹部マネジメントテキストのコンセプトの第1は、成果を出すリーダーである。その成果は成果につながる行動を起こすことによって得られる。さらにその行動は、知識と能力によって支えられている。学校管理職マネジメントテキストはこの行動を支える知識と能力を言語化、いわゆるテキスト化したものである。

知識については従来から開発されてきており、時代とともに優先順位が変わるものであるが、能力については開発されておらず、平成10年以降、教育委員会や学校現場に組織マネジメントの発想の必要性が言われ出して開発された、学校組織マネジメントプログラムがその役割を果たしてきた。

しかし、教育行政や学校にマネジメントの発想を導入するに当たり、企業等で一般的に実施されてきた組織マネジメントの手法が参考になったことも否めない。企業型の組織マネジメントでは、リーダーの能力として、①ビジョンの提示→②現状把握→③ギャップを埋めるための方策・実施となるが、公務である教育行政や学校現場では、地域住民の意向を反映しないビジョンは、新教育委員会制度の趣旨と乖離していると言わざるを得ない。このことから、コンセプトの第2として、①現状把握（民意の反映）→②ビジョンの提示→③ギャップを埋めるための方策・実施とした。

### 3 学校管理職マネジメントテキスト開発への示唆

本研究会が開発すべき新（公務員型）組織マネジメントのテキストの構成は、昨年度の報告書のとおり、①情報収集、②分析、③構想、④企画、⑤実行、⑥判断であるが、今年度における研究は①情報収集、②分析までであった。今後残る4つのテキストの開発に向けて継続的な調査研究を進めることによって、新しい時代に呼応した学校運営を支える一助となるものと確信している。

（日渡 円）





## V. その他収集した情報

## 省察（リフレクション）と分析の力

全国学力・体力テストでトップクラスの福井県の教育研究所では、どのような教育研究がなされているのか、その特色は何かを参加したセッションの発表からふりかえってみたい。

まず、午前中の研究発表①では、教育研究所 調査研究部 学力調査分析ユニットの三谷和範主任指導主事による「学力調査による学習指導改善サイクルについて」の発表を参観した。第1の特色は、「全国学力・学習状況調査」の福井県独自分析サイクルの速さである。通常、4月下旬に試験が実施され、8月頃文科省から結果が公表される。しかし福井県では、4月には「サンプル分析」（小中500人分）をチームで始め、5月には速報として、全体的な成果と課題を教育研究所のHPから発信をし、データを基に全市町校長会等で分析の研修をしている。さらに8月には、各教科の分析はもとより、児童生徒質問紙調査やQ-Uとの相関関係を解析したり、聞き取り調査を行ったりと、より詳細に分析した「全体データ分析」がHPに公表されている。第2の特色は、「SASA（福井県学力調査）」における、「C問題」である。福井県では1951（昭和26）年より、県独自の学力調査を行ってきている。今年度より「A 基礎力問題」「B 活用力問題」に加え、「C チャレンジ問題」（実社会の生活の中で直接活かせるような総合的な問題）が導入されている。第3の特色は、お茶の水女子大学の耳塚寛明教授、慶應義塾大学の中室牧子准教授、京都大学の石井真英准教授など国内トップクラスの研究者を外部専門研究者（アドバイザー）として連携し、学力調査の分析を行っている。なお、学力調査自体での福井大学との連携は行われていないとのことである。全国学調とSASAの2つの調査を一括で管理、分析を行うことで課題に対して早期に対応するとともに「C問題」という21世紀型スキルの育成を見据えた県独自の取組により、全国をリードする学力向上に努めていることがわかる。

午後の研究発表②では、三方中学校の呉林寛隆教諭による「自然やエネルギーの観点からとらえた発展的な環境教育～小中で連携して取り組むキャリア教育の推進～」の発表を参観した。

三方中学校では学校エコ改修におけるソフト事業として、環境教育に取り組んでいる。「エネルギーと私たちの生活（中1）」「人と自然の共生を目指して（中2）」「わたしたちのまちづくりプラン（中3）」というステップを通じ、将来を見つめたキャリア教育を推進している。校舎や地域そのものが教材であり、そこに慶應義塾大学や東京大学、東洋大学などの県外の大学教員・学生による講義等を通じ、学びを深めている。その際、指導力向上事業による財政的な支援も大きな支えとなっている。副題の小中連携に関しては、中学校教員が小学校へ出前講義を行い、環境教育を実施しているとのことである。先に子どもを見ることで実態把握ができたとのことである。なお、地元の福井大学との連携については今後とのことであった。

ポスターセッションでは、「県外派遣からみた福井らしさ」「小・中・高に縦糸を通す英語指導」「望ましい学級集団育成についての研究」などの発表を参観したが、それぞれ基本的な事柄（当たり前のこと）に真摯に向き合い、データや実態を丁寧に分析した内容であった。

最後のシンポジウム「今、教員は何をすべきか～これからの時代の学力と教員の力量形成について考える～」での、福井大学の柳沢昌一教授のお話（新しい学習を実現するための四つの鍵）からも福井大学教職大学院で取り組んでいる「省察」（リフレクション）する力、それを学力調査や授業改善に結びつけていく分析の力が、福井県の学力を支えているのではないかと考えたところである。これらの力を高める養成と研修の実際について今後も調査していきたい。

（宮崎大学 押田貴久）

## 情報収集報告書

収集先：平成27年度 第31回福井県教育研究所 研究発表会交流会

収集内容：ポスターセッション

総数19の発表があった。福井県教育研究所の所員による発表と学校現場からの発表であった。発表者、聴講者ともに非常に熱心であり、活発な意見交換がなされ、非常に盛況であった。下図はその様子の一部である。



福井県教育研究所の所員の発表はどれもエビデンスに基づいた内容のものばかりであった。そのため、説明も説得力のあるものであり、聴講者からの質問に対する回答も的確なものであった。改めて情報収集の大切さを確認した。また、分析も客観性が保たれたものであり、誰もが納得できるものであった。

学校現場からの発表は多くは実践報告であった。実践の結果の反省を生かし、改善が加えられ、工夫がなされていた。非常に参考になるものばかりである。しかしながら、打ち手として現状の分析に職員の間関係が反映されており、そのため、直接的なものでもないものも見られた。現場では無視できない要因であることを改めて確認された。また、取組の根拠として、経験によるものも散見され、偏った視点での情報がみられた。

以上のことから、今後の研修では、これまでどおり、打ち手を考える前には的確な情報を収集し、それに基づき分析を行うことをしっかりと意識するとともに、人間関係を排除して考えることを併せて伝えていきたい。打ち手に発想の広がりや妨げかねないだけに、受講者に十分に注意するようしっかりと伝えていくようにしたい。今後もこのような学校現場での発表を視察することは有効であるので、積極的に取り入れていきたい。

(長崎県教育センター 桑原鉄次)

# 報告書（学力調査分科会）

## 1. 研究発表交流会概要：

研究発表そのものは50分で行われ、午前と午後8本ずつ計16本の分科会がもたれた。内容は各教科等の指導に始まり学校給食・教育相談といった分野まで、様々な取組での研究成果が発表されていたが、驚いたのはその半数が高等学校における取組内容だったことである。

初めは県立施設での開催だから当然か…と感じられたが、話を聞くうちに県全体で幼児期から高校までの校種間接続を意識した教育施策「福井型18年教育」を進めていることが判明。今回の交流会を主催する教育研究所自体も、平成25年に設置された「機能強化検討委員会」において機能強化に向けた提言が取りまとめられ、それに基づいて4課1室体制から3部1室に組織改編が行われるとともに、28年度には新施設に移転するとのこと。教育行政と学校現場の連携というか結びつきの強さのようなものが感じられる取組だった。

## 2. 学力調査分科会：

1本目の学力調査分科会では、「学力調査による学習指導サイクルについて」と題し、全国学テやSASA（福井県学力調査）の結果を一括して分析・管理し、その成果を現場に還元し授業改善等を進めている取組が紹介された。

その特徴の第一にあげられるべきは、昭和43（1968）年以降60年以上にわたってSASA（**Student Academic Skills Assessment**）という「福井県学力調査」を実施・継続してきたことである。全国学テ（福井県では「全国学調」と表記）が、その種々の問題点や課題から実施が見送られていた期間も県独自に予算措置を行い、学力の定着や向上を意図し続けてきたという事実は、県全体としての方向性、或いは一貫性のようなものが具現化された取組と見受けられる。

その歴史をたどれば、調査の目的が「学習指導の反省と改善」からスタートしたり、対象者がその時々で変わるとともにデータ処理が抽出から悉皆になったり、さらには評価の観点から到達度評価に変わったりといった様々な変遷が見られるが、小5と中2の対象者全員に個人別データを返却している現時点においても、全国の先駆的取組として評価されるべきものがある。問題作成に関して、福井県教育庁（一般の教育委員会事務局に相当か？）の指導主事や教育研究所の研究者はもちろん、現場の教員も加えた三者で行われるというのも協力体制がうかがえるし、各校が個別に行っているQ・U（**Questionnaire-Utilities**=学校満足度尺度）アンケートの結果とリンクさせて、学力との相関関係を調べたりしているというのも、全県が一丸となって取り組もうとする姿勢の現れと感じられた。

その他にも、全国学テに関して文科省による全体データ分析（8月）に先だち、4月段階で500人規模のサンプル集計と分析を県独自に行うことで適時性を高めたり、各種結果から小学校においては「共生」「けじめ」、中学校においては「共生」「責任」といった項目と学力に高い相関関係が見られることから、各種研修における学級経営や学習指導のねらいとして取り上げたりしている。加えて、全市町における校長会や教頭会の機会を利用しての研修会で申し出に基づいて解説を行ったり、各校で行われる研修に主事が講師として出向いて研修を実施したりするのも、学校現場への強力なバックアップになると思われる。学校園における組織力の強化とか校園長のリーダーシップなどは、しばしば昨今の教育課題として取り上げられるが、校園長の思いが組織全体に浸透したり、組織全体が同一の方向性を指向したりするのはなかなか難しい。福井県のように県全体の方向性が軌を一にし、学校園を強力に支援する姿勢が全国学テの結果と直結しているものと思われ、教育行政のありようとして示唆するものは大きいと感じられた。

（作成者：稲垣 健）

SASA(福井県学力調査)のあゆみ

年度	実施	内容	時期	対象	実施	実施	実施	実施	実施	実施	実施
1951	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1952	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1953	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1954	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1955	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1956	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1957	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1958	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1959	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1960	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1961	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1962	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1963	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1964	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1965	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1966	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1967	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1968	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1969	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1970	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1971	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1972	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1973	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1974	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1975	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1976	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1977	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1978	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1979	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1980	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1981	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1982	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1983	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1984	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1985	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1986	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1987	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1988	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1989	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1990	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1991	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1992	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1993	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1994	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1995	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1996	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1997	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1998	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
1999	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2000	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2001	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2002	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2003	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2004	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2005	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2006	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2007	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2008	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2009	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2010	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2011	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2012	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2013	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2014	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2015	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2016	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2017	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2018	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2019	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2020	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2021	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2022	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校
2023	実施	福井県標準学力検査	4月	全	小学校	12月	全	中学校	12月	全	中学校

↑ 福井県学力調査のあゆみ



↑ 1951（昭和26）年実施第1回報告書



↑ 主な変更のあった年次の報告書



↑ 分科会後のポスターセッションの様子

# 福井県教育研究所研究発表交流会参加報告

新潟市教育委員会  
教職員課 池田 浩

## 1 今、管理職に求められる力

社会の複雑化、さらに国際化など学校を取り巻く環境の変化が加速度的に進んでおり、今後もより進んでいくことは間違いない。そして、その対象は、小学校、中学校、高等学校のみならず、幼稚園、保育園、こども園、さらに中等教育学校も含まれる。また、管理職が校内で求められる力も、教職員の管理から学習指導、生徒指導、さらに今日的な課題であるチーム学校への支援など、過去と比較して多岐に分かれ、拡大していく傾向にある。今、そのような状況の中でも対応できる管理職が求められている。

これまで、私たちは主に小・中学校の管理職を対象として「新しい時代に対応する学校マネジメントの力」を研究してきたが、その力は、高等学校の管理職に求められる力でもあると考えられる。今回の研究発表交流会を通して、私たちの研究の高等学校管理職への応用の可能性を探りたいと考えた。

## 2 若狭高校の発表の概要

(1) 研究テーマ 「SSHや総合的な学習における課題研究の評価とはいかにあるべきか」

(2) 研究の概要

○評価基準、評価方法の設定

・大学教員、地域の有識者と共同で、探求的な学習で育成したい学力を検討した。特に「課題設定能力」に注目し、パフォーマンス評価を用い、ルーブリックを検討した。

○評価の実施

・作成した評価基準をもとに形成的に評価を行い、保障すべき学力が実際に評価に反映され、学習を通じて成長しているのかを考察した。評価結果を今後の指導にいかに関与させるのか、また、評価基準そのものの評価も実施した。

○外部評価の実施

・活動の段階ごとに、有識者および地域の方々による評価基準・方法の評価を行った。

(3) 成果

① 育てたい力（目標）がいつどのように育っているのか、形成的に評価（形成的評価）することができ、生徒の学びを明らかにし、カリキュラムの改善に生かされた。

② 生徒に評価基準を示し、生徒が自己評価することで自らの進むべき目標、方向性が明確になり、自らの状態を把握しやすくなった。

③ 指導する教員が、評価基準、ルーブリックが生徒の「課題設定能力」を反映しているか、を考え、教員同士で共有することで指導やカリキュラムが改善されていった。

## 3 高等学校管理職のマネジメント

発表会の後、若狭高校から参加した発表者に、自校の管理職のマネジメントのポイントについて質問したところ、以下のような回答を得た。

・やる気のある教員を支える構えが徹底している。例えば、職員会議ではほめる、東京大学、京都大学などと繋ぎ自校の実践を価値付けていく等、多忙な中、懸命に取り組んでいる教員の意欲を喚起するような働きかけが継続的に行われている。

・一見ボトムアップ中心の学校に見えるが、それを支えているのは、実は管理職のトップダウンである。職員の中のイノベーションを起こしたいという意欲を引き出し、具現化している。

現在、若狭高校の管理職が行っているマネジメントは、まさに我々が求めている「新しい時代に対応する学校管理職のマネジメント」のスタイルである。それは、これまでの学校文化に固定化された発想ではなく、「校内外の情報を的確に収集・分析し、学校としての戦略を構想する」さらに「実行・修正をサイクルで実施」し、「そのリーダーシップを管理職がとる」というマネジメントである。

若狭高校の実践に触れ、改めて、私たちが求めている新しい管理職像、マネジメント像は、小学校・中学校・高等学校という学校種に関わらないということを確認することができた。

今後、学校種を越えて成果を上げる研修のあり方について、さらに研究していきたい。

平成27年度第31回福井県教育研究所研究発表交流会における調査研究成果報告

◎日時；平成28年2月12日（金）15：10～16：30

◎会場；福井県教育研究所大講義室

◎シンポジスト；日渡 円（兵庫教育大学）、石井英真（京都大学）、柳澤昌一（福井大学）  
コーディネーター；牧田秀昭（福井県教育研究所）

【「総合的な教師力向上のための調査研究事業」との関連から】

- 本シンポジウムは、これからの子供たちに求められる学力について整理し、教師に求められる指導力や、その指導力向上のために何をすべきかについて考えていくことをねらいとしている。
- 石井氏は、主に、今後、子供に求められる学力について、社会情勢の変化に対応する能力等に焦点化し、本質的な学びのプロセスを体験させることの重要性についてふれ、教師の授業観の転換が必要であることを指摘した。
- また、日渡氏は、今後、教員に求められる能力について、特に管理職である校長に焦点をあて、学校経営で生じる対課題面を「情報収集－分析－構想－企画－判断－実行」のプロセスの中でマネジメント力を発揮し、リーダーシップを図りながら組織的に取り組むことの重要性を指摘した。
- さらに、柳澤氏は、今後、教員に求められる能力を身に付けるための鍵として、例えば、実践から学ぶこの大切さに言及しながら、①評価の転換と開発、②省察的カリキュラムデザイン、③学校拠点カリキュラムマネジメント、④教師自身の「主体的・協働的な学び」の重要性を指摘した。
- このように、今後、子供に求められる学力を育むため、教員に求められる能力について、3氏のそれぞれの研究分野から専門的な内容について聞くことができた。そこで、各氏の考えを踏まえ、本調査研究との関連について、次の通り整理した。
  - ① 今後、教員に求められる能力は、一方向から一方的に与えられるものではなく、様々な情報から必要なものを抜き出し、実態や状況に応じた手立て（解決策）で取り組むことができる能力を身に付けていくことが必要である。
  - ② その能力は、閉ざされた世界ではなく、外部に開かれたものでなければならぬため、体験的な取組を取り入れ、学校だけではなく家庭や地域社会と連携しながらとらえていくことが重要である。
  - ③ このことから、本調査研究で開発している研修プログラムで導入しているケース演習（個人ワーク、グループワーク）については、個人思考とグループ思考のバランスが重要であることや、それぞれのワークのプロセスにおいて、自分の能力がどのように開発されたかをリフレクションすることが大切であることを再確認できた。
  - ④ また、講義・演習テキストに掲載されている情報も学校教育、社会教育の様々な分野領域から収集されていることから、これらの情報をどのようなケース演習で取り組むかによって管理職のマネジメント力の向上につながるものと考えられることができる。
  - ⑤ 本調査研究の試行研修プログラムは、管理職（校長）を対象とした内容であるが、3氏共通に触れていた「子供をどのように育てたいのか」という理念は、管理職として自校の教職員全体で共有すべきものであり、そのために教師自身が研修・研究していく姿勢を身に付けることが大切であることを最後に確認できた。（文責 鈴木 淳）





情報収集報告書	
1 会議名	福井県教育研究所研究発表交流会
2 期 日	平成28年2月12日(金)
3 場 所	福井県教育研究所・青少年センター
4 報告者	延岡市立旭中学校 校長 谷口 史子
5 報告内容	<p>研究発表②【グローバル人材の育成を目指した探求型学習の指導】 発表者 高志高校 (教頭 吉田 繁、教諭 山内 悟)</p> <hr/> <p>《本分科会における気づき等(基本的に良さについて)》</p> <p>A 教員養成課程の学生や若手教員が多数参加していることから → ハイレベルな研究発表交流会に早い時期から参加し、先進的な取り組みに触れて刺激を受けることで、参加者自身の学習意欲にもつながっているようである。(準備の内容やレベルにも影響)</p> <p>B 発表内容から → 成果が出ている取組についての発表である。その成果には成果に結びつく学校の取組が当然見られる。 → 学校の研修体制等の整備により、成果を出すための行動を支える一定の資質能力(知識・応用能力)が職員に身に付いているようである。</p> <p>C 発表校に高校が多いことから → 全国学力調査等の小中の高い結果を受けて高校でも授業改善などの意識改革が進んでいるようである。</p> <p>D 本会を含めて、研究発表をする機会が若手にも多くあることから → 指導力を教え込む教育ではなく、教師側のスキルアップ、探究心の向上など教師の指導方法の工夫改善などのモチベーションがあがっている姿が見られる。</p> <p>☆ A～Dの状況から → 本分科会の参加者や発表者のように、教職員一人一人の積極性や意欲を高め、問題を解決していくためには、現状を把握し、ありたい姿に近づくための方策が必要で、管理職のマネジメント力が大きく影響すると思われる。当然、情報収集・分析・企画・構想などは、管理職がすべてを行えるわけではないことから、慣例にとらわれない、新たな発想による人的配置や担当のあり方など対人面の応用力も管理職には求められる。</p>



## VI. 參考資料

新しい時代に対応する

学校管理職マネジメント研修  
～校長のリーダーシップ～

講義・演習 テキスト

スクールリーダーのための

課題解決スキル

～情報収集～

～分析～

～構想～

兵庫教育大学

新しい時代に対応する学校管理職マネジメント研修に係る研究会



# 目次

## ～ケース本文～

●現在の状況	3
--------	---

## ～補助資料～

1 校区内の状況	6
2 学級編成・校舎配置	7
3 教職員の人事管理	7
4 教職員の情報及び校務分掌について	8
5 生徒数の概要	9
6 学校経営方針	10
7 平成26年度年間行事実施状況	11
8 小中連携	11
9 学校評価等	13
10 施設・設備の管理	13
11 全国学力・学習状況調査の結果から	15
12 その他資料	17

## ～ケース本文～

### ●現在の状況 『朝日南中学校着任前後の動き』

(10月10日)

加東県内にある由井市外の大規模校に教頭として勤務していた谷口教頭は、教頭8年目で、今の学校は3校目である。10日の午前中、突然、校長室に呼ばれる。

「途中人事の異動予告があります。あなたに、10月20日付で“由井市立朝日南中学校”の校長として赴任してもらうことになりました。現在、朝日南中の校長である山中校長が急病で倒れ休職することになり、直接引き継ぎもできない状況のようです。」と校長から伝えられる。

来週早々に朝日南中に出向き、原川教頭から、山中校長からの伝言等を聞き、引き継ぎを受けるよう指示があった。

(10月14日)

連休明け早々、朝日南中学校に、朝一番で出向く。校長室で、原川教頭から山中校長の伝言を伝えていただいた。

朝日南中学校の行事等における生徒の良さや部活動で結果を残すだけの頑張りが見られるなどの特色、続いて、本校の課題である学習面の問題について話を聞いた。学力については、全国学力検査の結果を基に話を聞いたが、全体的にどの教科も全国平均、県平均に比べ、かなり厳しい状況であった。

前任校長としては、本年度後半から次年度に向けて、学習面に力点を置いてほしいとのことであった。

また、原川教頭は自身の見解も校長の伝言に加えて話してくれた。10年前のかなり荒れた頃に比べると、生徒指導上、確かに問題発生件数など改善されてきているところもあるが、校内外を含めて問題がないわけではないとのことである。教職員の指導の在り方も含め、学習以前の生徒指導の対応が今後の最重要課題ととらえているようである。さらに、教職員やPTA、地域の状況等について、原川教頭の主観となる部分もあったが、準備してもらった資料を基に話を聞くことができた。

教職員については、指導力に問題を抱えていたり、精神疾患による休職歴のある教職員もいるが、中堅、若手が多い年齢構成で、全体的に雰囲気は明るくなってきているようであった。

PTAは、本年度はかなり協力的な雰囲気があるとのことであった。PTA会長のリーダーシップもあり、学校との話し合いもよくなされて相互理解が進み、学校との連携が図られているようである。過去には、学校との信頼関係が崩れてしまったときもあるようであった。

地域については、何かあれば苦情も含めて、学校に連絡してくれる人が多いようであった。区長の中には、幾分、学校に批判的な方もおられるが、強いリーダーシップを図る区長会長のおかげもあり、学校とのやりとりはスムーズなようであった。

オープンスクールや学校支援会議を通じて、相互の情報の共有や相互理解の機会はつくられており、特に、毎月行われる学校支援会議における意見交換は、現状把握と今後の方策を検討する貴重な場となっているようである。

(10月20日)

いよいよ着任の日である。朝、7時30分に教頭、教務主任と、本日の流れや当面の予定について打ち合わせを行う。8時、職員室にて、全職員と初めて顔を合わせ、あいさつを行った。

1校時に、企画委員会を行い、各学年、各校務分掌の状況を主任から資料をもとに概略の説明を受け、現状を把握する。各学年とも、問題行動が発生している状況はあるものの授業において、指導が通らない場面は全体的には少なくなってきたようであった。ただ、一部の教員に対して、反抗的な態度をとる生徒がおり、落ち着かない教科の授業も見られるようである。学級崩壊している学級はないとのことであった。

校務分掌関係は、各部とも計画的に行事運営の企画、立案、実施ができてきているようであるが、実施後の反省が十分なされず、翌年に向けての改善や関係している年度内の行事への反映が不十分なようであった。

2校時は、短時間ずつではあるが各クラスの授業を見て回る。確かに学年によっては、生徒指導主事から報告のあったとおり、授業中に落ち着かない雰囲気の見受けられる。気になるのは、同じ状況でも、注意を「する」、「しない」教師がいることであった。

3校時は、事務長と予算執行状況や、事務からみた朝日南中学校について話を聞いた。先を見通して、計画的に準備のための購入相談等に来る先生もいれば、いつも場当たりの購入希望を言う先生もいるとのことであった。施設管理については、生徒の器物損壊などの対応も含め、原川教頭との連携が十分とられているようであった。

4校時以降は、原川教頭を始め各主任等が準備してくれた資料や本年度4月からの各種資料に目を通す時間とした。

着任当日ではあったが、夜は、PTA三役と顔合わせを行った。PTA三役の方々は、前校長が急な病気での休職ということもあり、基本的に学校へのバックアップに積極的であった。特に、PTA会長は、学校正常化に向けて、「今が正念場だ」という意識を強くもっておられるようであった。

(10月21日)

2年生の弁論大会が、午前中、行われたが、発表する生徒は真剣に発表する姿が見られたが、聞く生徒の中には、寝転がっていたり、私語をする姿も見られた。弁論大会中に生活ノートに目を通して職員や指導しようとする姿勢の見られない職員がみられた。学年主任を中心とした学年体制の在り方にやや不安を感じた。

授業のあいている主任の先生方を校長室に呼んで話しを聞いていく。気になった2年の学年主任とまず話をすることにした。学年主任は、昨年からの持ち上がりであるが、昨年、3年学級担任で、生徒指導の疲労から精神疾患で休職していた職員が年度初めに復職し、この学年に副担任で所属しており、「あれはしない」「これはしない」の要望が多く、まわりの職員とのコミュニケーションがとれないとのことであった。まわりの職員のやる気をそぐことも多く、3年生から2年生に生徒会が引き継がれ、2年生が学校を引っ張っていかなくてはならない時期に、かなり厳しい状況があるようであった。それでも、若手職員が頑張ろうと声を掛け合っている様子も見られるとのこと、この学年には、気をとめておく必要があると強く感じた。

(10月22日)



朝日南中学校に進学してくる朝日小学校、桜ヶ丘小学校を訪問し、各校長と情報交換を行った。二人の校長とも、「小学校の時は、結構ちゃんとしているんだけど・・・」と話す場面もあった。

小中連携の必要性は理解しているものの、小中それぞれに学校の事情が前面に出ており、実体を伴った小中連携はなされていないようであった。

(10月23日)

由井市の商工会役員でもある同窓会長を訪ねた。同窓会長は、歴代PTA会長を代表するとともに、由井市の商工会会長をつとめるなどいわゆる“由井市の顔”となる人物である。同窓会長は、朝日南中学校のここ10年近くの荒れを憂慮しつつも、「今後の由井市を引っ張る人材の育成に学校は頑張ってもらいたい」という熱い思いを語られた。また、「若い世代も多い由井市であり、学校は、目の前の子どもの育成だけではなく、地域に貢献できる活動も今後は、是非、取り入れてほしい」とも話された。

(10月24日)

何かとお世話になる関係機関へのあいさつ回りを行った。

まず、いくつかの事案もある警察署。生活安全課の少年係長と話をすることができたが、この1～2年は、朝日南中学校の関わる事案は減ってきていることや商店街等から警察への直接の苦情や通報は、かなり少なくなってきたと聞かされた。

次に、校区内の自治会長を訪ねた。自治会長は、今年で3年目とのことであったが、生まれも育ちも由井市という生粋の由井市民である。「この町のためなら」という思いから非常に強いリーダーシップを発揮されているのがよく伝わってきた。

(10月25日・26日)

この地域では一番の祭りでもある「由井神社の秋季例祭」が行われた。今年は、ちょうど週末と重なったため、学校を休みとすることはなかったが、地域の大きな文化的行事で、地域の方々はもちろんであるが、生徒、保護者の多くが参加していた。

祭りに参加してみると、学校ではいい加減な授業態度の男子生徒が、真剣な表情で大人と御輿を担ぎ、頑張っている姿も見られた。

参加している地域の方々とも話をすることができ、古き良き伝統を守り地域を大切にしていこうとしている方が年齢を問わず多いことに気づかされた。

(10月27日)

着任2週目に入る。先週一週間の内に、教職員やPTA役員、関係者と短い時間ではあったが話すことができ、ようやく今後のことを考えることができる時間ができた。

今週中には、オープンスクールや学校支援会議も行われる。朝日南中学校に着任した校長としての学校運営方針等を話す機会ともなる。

## ～補助資料～

### 1 校区内の状況

校区は、由井市南西部に在る。小学校区では、由井市立の朝日小、桜ヶ丘小の2校が朝日南中学校となる。なお、由井市立小学校は69校、中学校は35校ある。

校区は、住宅街と田園地帯が混在するほか、ヒヤープ電工とその関連会社が連なる工場地帯がある。但し、リーマンショックの影響により、ヒヤープ電工由井工場は2010年に規模の縮小が図られた。

校区内に、大型ショッピングセンターが開店（2004年）、それに伴いJR由井線に「朝日リバーサイド駅」が開業したため、周辺校区ではますます宅地・住宅開発が進んでいる。

新しい住宅地に比較的若い世代の世帯が入ってきていることもあってか、由井市全体に対しても年齢構成率は、現在のところ若干、若い傾向にある地域である。

校区は広い（朝日南中を起点にもっとも遠い地区で約3.5km）が、全員徒歩通学である。また、大きな「祭」を開催する地域でもある。校区内の「由井神社」の秋季例祭は、この地区では最大の氏子数を抱える祭りであり、提灯練りが有名で由井祭とも呼ばれている。平成10年には加東県指定無形重要文化財に指定されている。毎年秋に2日間開催される。神輿3台。屋台18地区、壇尻4地区、獅子舞1地区、提灯練り7地区の30地区が参加する。（例年一日目の午後と二日目は「地域の文化的行事参加」のため休業日としている。）

校区	人口	～14歳	15～64歳	65歳～
朝日小	5,451	896	3,234	1,321
桜ヶ丘小	6,463	917	3,880	1,666
合計	11,914	1,813	7,114	2,987

由井市 全体	284,066	40,771	160,419	82,876
-----------	---------	--------	---------	--------

由井市総務局総務部情報政策課（H25.9.30）発表

## 2 学級編成・校舎配置

(学級)

第1学年 5クラス  
 第2学年 5クラス  
 第3学年 5クラス  
 特別支援学級(知的) 1クラス  
 特別支援学級(情緒) 1クラス

(校舎配置)

第1学年 1階  
 第2学年 2階  
 第3学年 3階  
 特別支援学級 1階

※ 生徒指導上の配慮から他学年の階への立ち入りは禁止している。

※ トイレの使用についても学年別に場所を指定している。

## 3 教職員の人事管理(9月末現在)

### ① 職員数

その他、SC1名、ALT1名

	校長	教頭	主幹 教諭	教諭	臨時 講師	非常 勤	養護 教諭	事務 職員	校務 技師	合計
男	1	1	1	16	2				1	22
女				9	2		1	1		13

\*上記の内加配教員は、生徒指導1、少人数指導3

### ② 学年組織

	校長・ 教頭	主幹 教諭	担任	特支 担任	学年 所属	非常勤	養護 教諭	事務 職員	校務 技師
1学年			5		4				
2学年			5		4				
3学年			5		4				
学年外	2	1		2			1	1	1

### ③ 年齢構成

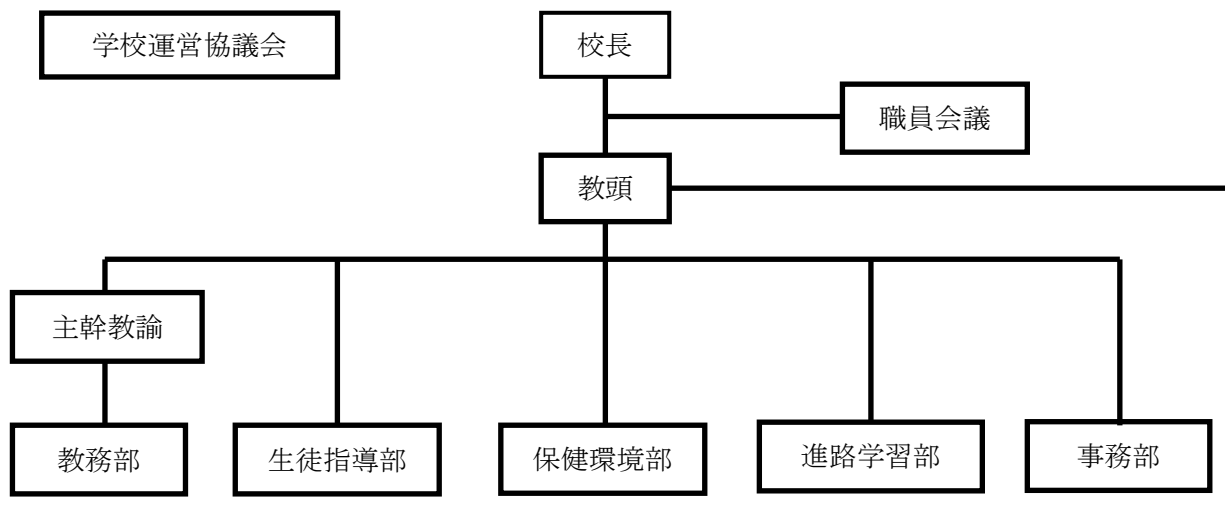
	20代	30代	40代	50代	計
男	7	6	4	5	22
女	3	4	2	4	13

#### 4 教職員の情報及び校務分掌について

##### ① 教職員の情報

	職名	氏名	年令	性別	勤続年数	学年部	所持免許	主な分掌	備考
1	教頭	日浦 規生	52	男	2	学年外	数学	地域連携	
2	主幹教諭	加賀 幹宏	45	男	1	学年外	音楽	教務	
3	教諭	栗原 禮子	58	女	5	1学年主任	英語	1学年主任	
4	教諭	鷺見 章雄	56	男	4	2学年主任	理科	2学年主任	
5	教諭	藤巻 栄二郎	53	男	7	特別支援	保体	情緒学級	
6	教諭	粕谷 準	53	男	2	3学年主任	保体	3学年主任	
7	教諭	山川 晴子	50	女	2	特別支援	音楽	知的学級	
8	教諭	羽田 令子	48	女	2	3年副任	国語	進路指導	
9	教諭	伴 亨敏	46	男	3	2年1組	理科	施設設備	
10	教諭	松浦 正	43	男	7	3年5組	保体	生徒指導	
11	教諭	角田 よし子	43	女	6	2年副任	英語	道徳指導	
12	教諭	梶野 祥仁	38	男	2	3年1組	社会	PTA	
13	教諭	青嶋 より	37	女	1	3年3組	国語	図書館	
14	教諭	湯川 君代	36	女	3	2年4組	社会	研究主任	
15	教諭	田淵 哲功	35	男	6	1年副任	技術	情報教育	
16	教諭	田畑 浩志	35	男	5	2年2組	国語	特別活動	
17	教諭	国島 昭雄	34	男	2	1年2組	数学	学級指導	
18	教諭	田村 顕士	33	男	3	1年1組	英語	国際理解	
19	教諭	千本 陽美	33	女	6	1年3組	数学	学習指導	
20	教諭	金山 敏広	31	男	3	2年3組	社会	生徒会	
21	教諭	坂倉 麻由	29	女	2	3年4組	理科	教育相談	
22	教諭	三輪 淳	29	男	2	2年5組	英語	人権同和	
23	教諭	上野 洋章	28	男	1	1年4組	美術	広報	
24	教諭	竹村 郁文	25	男	3	3年2組	数学	総合学習	
25	教諭	松橋 光宏	25	男	3	1年副任	数学	教科書	
26	教諭	中村 英和	23	男	1	1年5組	理科	環境教育	
27	教諭	庄司 宏美	23	女	1	2年副任	保体	部活動	
28	講師	奥田 時雄	29	男	1	3年副任	国語	防災指導	
29	講師	海野 文夫	27	男	1	1年副任	保体	清掃指導	
30	講師	中尾 美鈴	27	女	1	3年副任	家庭	食育指導	
31	講師	長浜 敦子	23	女	1	2年副任	音楽	学籍	
32	事務職員	奥谷 彩代	55	女	4	学年外		学校事務	
33	養護教諭	岩室 沙由里	48	女	2	学年外		保健主事	
34	校務技師	木上 和昭	49	男	3	学年外		学校用務	
35	S. C	江川 亜矢	41	女		学年外			
36	ALT	ニコラス・ホント	38	男		学年外			

## ② 校務分掌等



### 各種委員会（※企画委員会は校長、教頭、各主任、他必要に応じて）

企画委員会（毎月） 生徒指導委員会（適宜） いじめ対応チーム（適宜）  
 生徒指導連絡会（毎週） 不登校指導連絡会（毎週） 学力向上対策委員会（適宜）  
 小中一貫教育推進検討委員会（毎学期） 道徳・人権指導委員会（毎学期）  
 学校保健委員会（年1回） 食育・給食推進委員会 特別支援教育委員会（学期1回）  
 心の教育推進委員会（学期1回以上） 学年組織検討委員会（年度末）  
 校務分掌検討委員会（年度末） 予算委員会（年2回） 労働安全衛生委員会（毎月）  
 情報管理委員会（学期1回） 食物アレルギー対応委員会（適宜） 学校業務改善対策委員会（適宜）

## 5 生徒数の概要

### ① 2014年度の生徒数

			学級数	男	女	計	学年総計
1年			5	93	89	182	186
2年			5	87	109	196	198
3年			5	98	92	190	193
特別支援学級	知的	1年	1	1	1	4	
		2年		1			
		3年			1		
	情緒	1年	1	1	1	5	
		2年		1			
		3年		1	1		
計		17	283	294	577		

### ② 生徒数の推移

年度	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
生徒数	526	575	547	534	527	556	565	535	501	549	577

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020
生徒数	568	564	553	549	541	531

## 6 学校経営方針

校訓	自主（じしゅ）	—自分の考えをしっかりと（正しく強く）
	協同（きょうどう）	—相手の立場を考えて行動しよう（仲良く力を合わせる）
	創造（そうぞう）	—自分の生活をきり拓く力をつけよう（よく考え工夫する）

### 平成 26 年度 学校経営方針

#### 学校教育目標

確かな学力を基盤とした心豊かにたくましく生き抜く力をもつ生徒の育成

#### 〔目指す学校像〕

- ① 生徒、教師などすべてのひとが「輝く」学校
- ② 地域や保護者から信頼される学校
- ③ 思いやりにあふれ規律正しい学校

#### 〔目指す生徒像〕

- ① 夢に向かってチャレンジする生徒
- ② 自分を大切にし、他人や自分の所属する集団
  - ・仲間を大切にできる生徒
  - ・他の意見に耳を傾け自己変革をしようとする生徒

#### 〔目指す教師像〕

- ① 教育に対する愛情を高め続けられる教師
- ② 生徒の心に寄り添い、保護者の思いに心を寄せられる教師
- ③ 教えるプロ、育てるプロとして専門知識・識見を有し、実践できる教師

#### 〔重点目標〕

##### 【知】

自学力を身に付けた生徒の育成  
 (具体的取組)  
 学び合い学習とノート指導  
 学習習慣・学習環境の確立  
 分かる授業の研究と実践

##### 【徳】

命を大切にする生徒の育成  
 (具体的取組)  
 全領域での「耕心」の取組  
 心通う集団づくり  
 道徳の時間の研究と実践

##### 【体】

心身ともに健康な生徒の育成  
 (具体的取組)  
 健全な生活習慣の確立  
 部活動の推進  
 防災・安全教育の実践

**つながり** 縦のつながり、横のつながりを意識した指導  
**やってみよう** 「することによってしか見えてこないものがある」ことを意識した指導  
**自治能力** よりよい集団づくりを通して個の成長を促すことを意識した指導  
**環境** 物的・人的環境が人の成長に大きな影響を及ぼすことを意識した指導  
**自立と自律** 学校を離れたときの生徒の姿を意識した指導

## 7 平成26年度年間行事実施状況

4月	着任式 始業式 入学式 対面式 実力考査(2・3年) 入学考査(1年) 身体計測 新入生歓迎行事(生徒会) 修学旅行(3年) 保健関係検査 自然教室(1年)
5月	小中一貫教育合同部会 授業参観・P T A総会・学年・学級理事会 家庭訪問 開校記念日 保健関係検査 実力考査(3年) 学校運営協議会 教育実習 朝日南中セミナー
6月	町別懇談会 保健関係検査 教育実習 計画訪問 愛護育成会総会 校区人権 期末考査 教育相談 学校水泳開始 避難訓練 生徒会選挙
7月	部活動壮行会 市総体 保護者会 終業式 地区総体 県総体
8月	校内研修 第1回人権のつどい ブロック総体 全国総体 愛護育成会補導
9月	始業式 実力考査 体育大会
10月	中間考査 地域の社会的行事 由井市人権教育研究会 弁論大会(2年) 愛護学習会 オープンスクール
11月	進路説明会(3年) 愛護学習会 避難訓練 実力考査(3年) 期末考査 文化発表会 職業体験(2年) 学校保健委員会 同和教育研究大会 学校運営協議会 少年の主張地区大会
12月	実力考査(3年) 終業式 人権のつどい 生徒会選挙 保護者会 総合学習発表会
1月	始業式 実力考査 保護者会(3年) 防災教育実施 私立高校入試 オーケストラ体験教室
2月	私立高校入試 就職選考 期末考査 学校運営協議会 学校保健委員会 入学説明会 公立高校推薦入試 避難訓練
3月	卒業生を送る会 就職生激励会 卒業式 公立高校入試 保護者会(1・2年) 小中連絡会 終業式 離任式

## 8 小中連携

由井市の小中一貫教育は平成21年度にスタートし、平成23年度からは「現行制度の運用上の取組の中で、小中学校の教職員が連携を深め、義務教育9年間を見通した視点での子どもの『育ち』と『学び』の適時性と連続性を重視した教育活動を、校区の特色を生かしつつ行っていく」として、各中学校区を1ブロックとし市内全35ブロックで推進している。

朝日南中ブロックにおいても、小中一貫として下記のような取組を進めている。頑張っている部会は担当の教師を中心に、一生懸命、取組を進めている。ただ、何のために、何を目指してやっているのかという部分が、全職員に浸透しきっておらず、個々の(各部会の)表面的な活動に終始している。

結局、「連携的な活動をする」という手段が目的となってしまう感がある。由井市の掲げる目的に達するためにはさらなる取組(教師間の意識の共有・連携)が必要であると思われる。

【朝日南中ブロック小中一貫教育一を目指す子ども像】

- ・挨拶などのマナーをしっかりと身につけ、正しく判断して行動できる子ども。
- ・確かな学力を身につけ、自ら学び、共に伸びる子ども。

① 平成26年度 年間行事予定（小中一貫教育関係）

月	主な取り組み	月	主な取り組み
4月	合同あいさつ運動（毎月10日）	10月	出前あいさつ運動
5月	推進委員会・合同部会 授業参観（小→中）・小中連絡会	11月	文化発表会・音楽会参観 出前授業（英語）
6月	出前あいさつ運動 出前授業（英語）	12月	小中合同特別支援学級交流会
7月	部活動交流（陸上）	1月	特別支援学級授業見学
8月	職員研修（小中合同）職員研修（特別支援教育）職員研修（カウンセリングマイ ンド）	2月	入学説明会 出前授業（英語）出前あいさつ運動 推進委員会
9月	推進委員会	3月	授業参観（中→小） 小中連絡会

② 平成25年度 活動報告

1 小中連携目標による基本的な生活習慣の定着をめざして

(1) みそあじ運動

- み：身だしなみを整える
- そ：そうじを一生懸命する
- あ：あいさつをきちんとする
- じ：時間を守る

朝日南愛護育成会の共通目標をもとに、基本的な生活習慣の確立をめざしている。

(2) あいさつ運動

- ア 小中連携した教職員によるあいさつ運動  
毎月10日に小中合同であいさつ運動を展開

- イ 出前あいさつ運動

中学校の生徒会役員や部活動のキャプテンなどが、学期に1回小学校に出向き、校門前であいさつ運動を行っている。

2 小中の連続した教育をめざして

(1) 英語科

小学校の外国語活動を支援し、中学校の英語教育につながるよう中学校の英語科教師による出前授業を行っている。

(2) 道徳

地域教材の開発をめざして、講師を招聘し、小中合同で研修を持った。2度にわたる合同研修を経て、郷土を愛する心を育てる教材開発を行った。

(3) 生徒会活動

新入生及び保護者への入学説明会で、スライドショーを用いた学校紹介を行い、中学生活への不安や疑問の解消に努めた。



#### (4) 合同職員研修

夏休みには、合同研修会で「由井検定」を体験し、由井市の小中の連続した教育について学んだ。学力の向上に向けて、共通の取組を模索する機会になった。

### 3 部活動での交流

中学校の吹奏楽部が、小学校スクールバンドとの合同演奏会や子ども会、小学校行事での演奏協力を行った。陸上や水泳、その他の部活動に小学生が交流し、共に活動することができた。

### 4 特別支援教育の連携

恒例になっている特別支援学級の交流会が、平成25年12月12日に行われ、中学生の司会進行で楽しい催しが営まれた。特別支援教育では、日頃からの交流と共に小学生の学校見学や授業見学を随時行っており、互いの児童生徒理解を深める場になっている。また、各校の研修会に互いに参加し、発達障害等に関し研修も進められている。

## 9 学校評価等

学校関係者評価委員会を7月、11月、2月の年3回、学校運営協議会も兼ねて実施している。なお、学校関係者評価委員会のメンバーは、学校運営協議5名と地域の団体の代表等3名、PTA会長・副会長3名、校長教頭2名の計13名で構成している。

生徒、保護者、教師による授業評価や学校評価を学期ごとに行い、学校関係者評価委員会での分析等も踏まえ、その都度公表している。

平成25年度の状況の中では、特に授業の充実を望む生徒・保護者の声が多く聞かれるとともに、教師からは家庭学習の充実の必要性が強く出されていた。学校関係者評価委員会の中では、ここ数年かなり生徒指導の状況は改善しているものの、より一層の心の教育の充実を図った上での学力の向上に向けた取組の必要性について指摘があがっている。

## 10 施設・設備の管理

### (1) 環境整備計画と整備状況について

昭和56年に竣工した校舎も築33年を経過し、これまでは改修で対応してきたが来年度から校舎改築に着手することとなっている。開校以来、段階的に施設設備の改善を図ってきたため、老朽化の度合いに差があるのが課題となっていたが、改築により改善される見込みである。平成15年に大規模改修を終えた北館西半分等は改築対象ではなく改築整備後も併存される。平成22年のグラウンド改修、平成17年のプール竣工と体育施設については整備が一段落している状況にある。

### (2) 施設・設備等の営繕と管理について

直接的な営繕・管理については、教頭、事務職員、校務技師の連携・協力により速やかな対応等を実施。問題行動等による破損については、状況把握を十分に行い、生徒指導部とも連携を図った対応を実施。学校が荒れた時期には「割れ窓理論」を念頭に営繕対応を積極的に行うことで環境整備を図ってきた。改築を好機と捉え、予防的な環境整備から、学習環境の整備へ展開すべき段階かもしれない。

### (3) 防火管理・防災管理について

防火管理者は教頭がつとめ全職員で自衛消防組織を編成し防火・防災に対応している。避難誘導訓練や安全点検は計画通り行えている。一方、消火設備の老朽化している箇所があること、一部生徒による消火器等設備へのいたずらや破損に対して指導を続けている。

### (4) 校舎の戸締まりについて

戸締まりの管理も教頭が指揮している。校務技師が勤務時間終了前に戸締まりするが、部活動などがあるため、生徒の下校後に教頭と残っている職員で戸締まりを確認している。生徒の下校も遅れがちで、指導上・防犯上の課題と言える。学校施設開放の業務も教頭が担当している。地域の諸団体との関係は比較的円滑である。

### (5) 諸会計の執行について

公費、私費ともに、予算委員会において協議し、それぞれの担当が執行している。

#### 【公費】

配当予算、補助金、委託金からなる。公費は、事務職員が中心になって執行計画を立て、各担当と連携しながら、執行している。由井市の会計規則に基づき執行する。予算全体が厳しい状況にある。

#### 【私費】

私費に関する取扱規程は、市の規程はなく、校内の規程のみであり、それに基づき執行されている。集金計画など全体の概要は予算委員会で確認されているが、執行管理の実質は、各担当任せになっているのが現状である。

給食費、学年会計ともに、全ての学年に滞納がある。兄弟関係のある家庭もあり、その中には就学援助費受給家庭も含まれている。

(引継書作成日現在の滞納家庭：1年8人、2年6人、3年5人)

### (6) 備品の管理について

「由井市立小中学校備品管理システム」を用いて、事務職員がデータ管理を行っている。一年に一度（主に長期休業中）、現状確認のため、全職員で備品点検を実施する。

通常の使用に際しての管理は、一般備品は、教頭・事務職員、教科備品は、各教科担当とし、補充、修繕などが生じた場合の管理は事務職員が行っている。

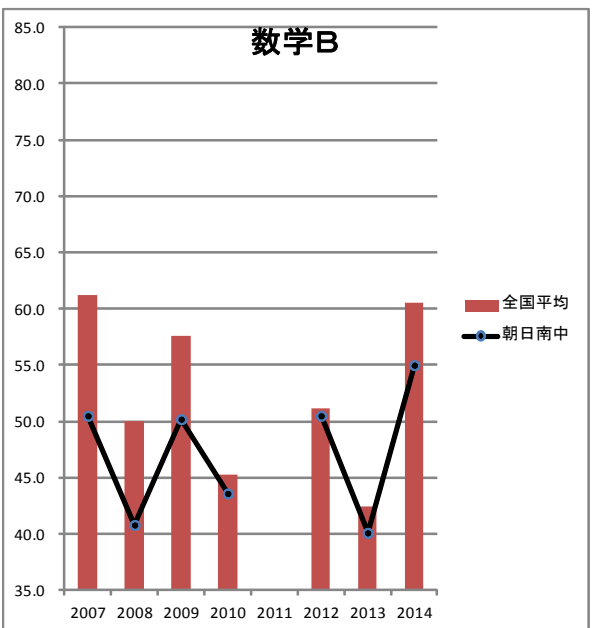
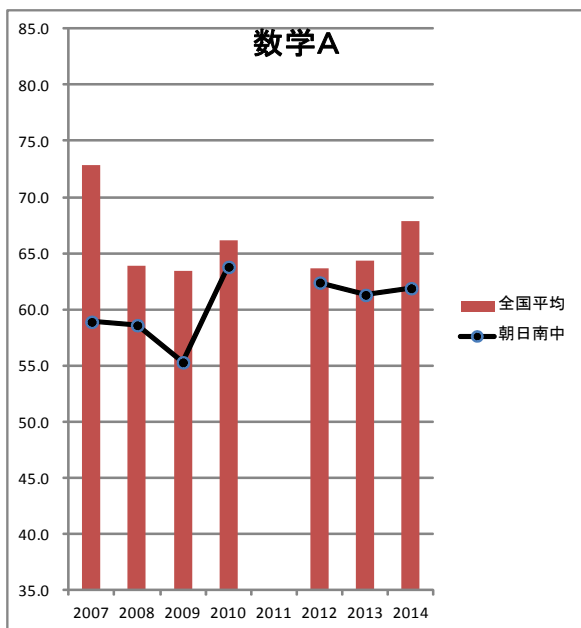
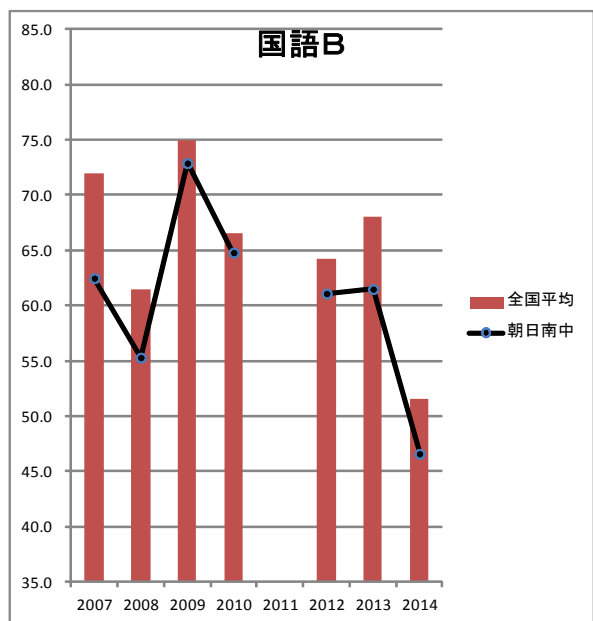
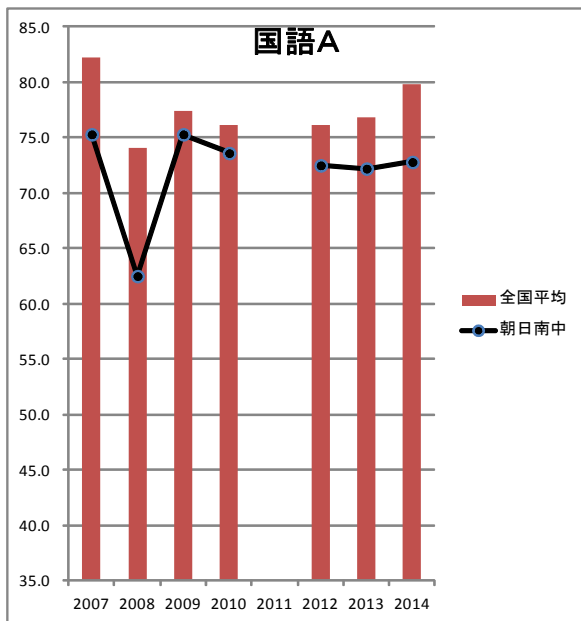
# 11 全国学力・学習状況調査の結果から

○全国学力・学習状況調査のデータ

○【中学校】全国学力・学習状況調査のデータ

全国平均					
年度/科目	国語A	国語B	数学A	数学B	
2007	82.2	72.0	72.8	61.2	悉皆
2008	74.1	61.5	63.9	50.0	悉皆
2009	77.4	75.0	63.4	57.6	悉皆
2010	76.1	66.5	66.1	45.2	抽出
2011					中止
2012	76.1	64.2	63.6	51.1	抽出
2013	76.8	68.0	64.3	42.4	抽出
2014	79.8	51.6	67.9	60.5	悉皆

朝日南中学校					
年度/科目	国語A	国語B	数学A	数学B	
2007	75.3	62.5	58.9	50.5	悉皆
2008	62.5	55.3	58.6	40.8	悉皆
2009	75.3	72.9	55.3	50.2	悉皆
2010	73.6	64.8	63.8	43.6	抽出
2011					中止
2012	72.5	61.1	62.4	50.5	抽出
2013	72.2	61.5	61.3	40.1	抽出
2014	72.8	46.6	61.9	55.0	悉皆



○特徴的な項目（市・県・全国平均との比較） ※文言は多少要約しているものもあり

<p>全て 上回り傾向</p>	<p>25. 家の手伝いをしているか 37. 地域の行事に参加しているか 44. 学校のきまりを守っているか</p>
<p>全て 下回り傾向</p>	<p>6. 自分に良いところがあると思うか 30. 家で学校の宿題をしているか 31. 家で、学校の授業の予習をしているか 32. 家で、学校の授業の復習をしているか 35. 学校に行くのは楽しいと思うか 48. 授業でグループの調べ活動をしているか 49. 授業で発表の機会があるか 50. 授業で話し合い活動をしているか 54. 国語の勉強は大切だと思うか 55. 国語の授業の内容はよくわかるか 56. 読書は好きか 57. 国語の学習は将来役に立つと思うか 58. 資料を読み、考えを書いたりしているか 59. 伝わるように発表の工夫をしているか 60. 理由が分かるように書いているか 61. 内容理解しながら文章を読んでいるか 73. 数学の勉強は好きか 75. 数学の授業の内容はよくわかるか 76. 数学ができるようになりたいか 77. 数学で諦めずに解き方を考えるか 80. 数学でもっと簡単な解き方を考えるか</p>

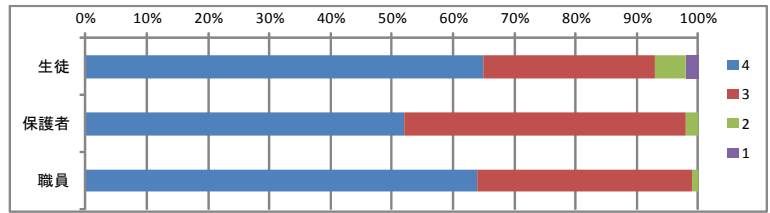
## 12 その他資料

### 学校評価の結果から（平成25年12月実施）

#### ○教育活動アンケート

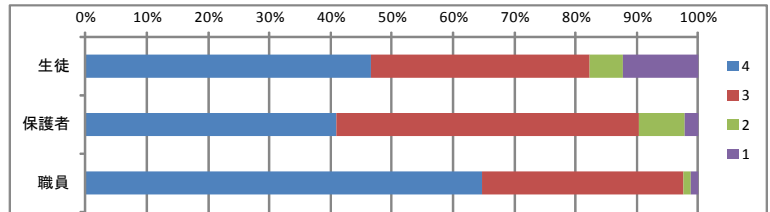
1 学校生活が充実していると思うか 数字は%

	4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう思 わない	1 そう 思わない
生徒	65	28	5	2
保護者	52	46	2	0
職員	64	35	1	0



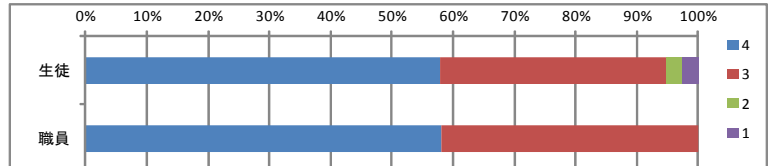
2 自分のよさが認められていると思うか 数字は%

	4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう思 わない	1 そう 思わない
生徒	42	32	5	11
保護者	38	46	7	2
職員	55	28	1	1



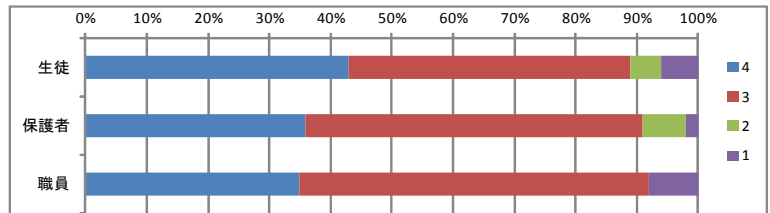
3 生徒同士で良さを認め合っているか。 数字は%

	4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう思 わない	1 そう 思わない
生徒	44	28	2	2
職員	58	42	0	0



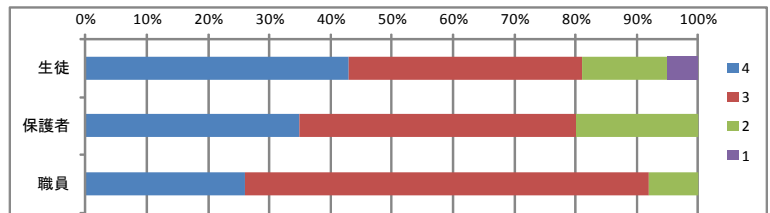
4 場に応じた言動ができているか 数字は%

	4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう思 わない	1 そう 思わない
生徒	43	46	5	6
保護者	36	55	7	2
職員	35	57	0	8



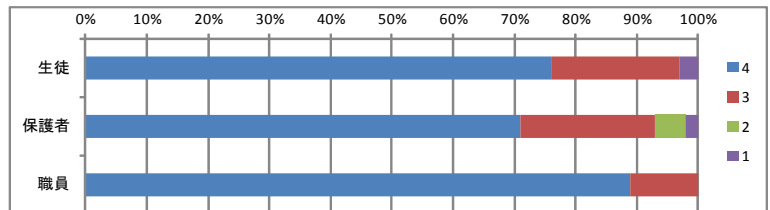
5 健康に気をつけているか 数字は%

	4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう思 わない	1 そう 思わない
生徒	43	38	14	5
保護者	35	45	20	0
職員	26	66	8	0



6 学校行事に進んで取り組んだか 数字は%

	4 そう思う	3 やや そう思う	2 あまりそう思 わない	1 そう 思わない
生徒	76	21	0	3
保護者	71	22	5	2
職員	89	11	0	0



## 平成25年度年末保護者アンケート（自由記述）

### 1 学校経営・教育課程について

- 3年間、楽しい学校生活を送ることができました。これも、先生方のおかげだと思っております。ありがとうございました。（3年）
- 毎日楽しそうに学校生活の話をする息子を、幸せな気持ちで見えていました。いつの日か母校に恩返しができるような人になってくれればと願っています。（3年）
- 中学校に入学して、あっという間の3年間でした。楽しかったこと、辛かったこと、様々な経験をして無事に卒業できること、大変うれしく思っています。先生方には常に熱心にご指導いただき、感謝しております。（3年）
- 担任の先生には3年間大変お世話になりました。いつも子どもの様子を気にかけてくださり、生活ノートのやりとりも、子どもにとってとても良いものだと思います。朝日南中学校の先生方には本当に感謝しています。（3年）
- 担任の先生の考えにより、各クラスの活動に差があることが気になりました。私の子ども担任の先生は、毎日お忙しい中熱心にご指導いただき、感謝しております。（2年）
- 日頃より、大変きめ細やかな指導をしてくださりありがとうございます。（2年）
- 身体も心も、のびのびと成長しているように感じられます。（1年）
- 1年間スムーズに中学校生活を送れたのは、温かく見守ってくださった先生方のおかげです。入学当時の不安が安心に変わりました。（1年）
- いつも、細やかな気配りとご指導をいただき感謝しております。（1年）
- 子どもの心を大切にしてくださるご指導に、感謝します。（1年）
- △ 3年 PTA 学年研修会（保護者向け講演会）の参加者が、少なすぎて驚きました。もっと関心のある内容に考え直した方がいいと思います。（3年）
- 学校行事では、子どもたちが自由に楽しめるよう規制を緩和して欲しいです。特に文化祭など、規則に基づいてしか参加できないオンステージは、おもしろ味に欠けるように思います。時には子どもたちを自由にさせてほしい。（2年）
- 学校行事には参加したいと思うのですが、小学校の行事と重なり参加できない時がありました。特に文化祭と小学校の運動会が重なってしまうので、どちらにも参加できるよう学校側も考慮していただきたいと思います。（2年）
- 学校の様子について、子どもを通してだけでは情報が少ないです。お便りはもちろんですが、ホームページをもっと更新して、情報や様子が分かるといいです。（1年）

### 2 学習指導について

- 毎日の宿題が多すぎると思います。（3年）
- 宿題の量が偏っていて、睡眠時間がしっかりとれない時があります。教科ごとで調整することはできないのでしょうか。（1年）
- 長期休業中に出される宿題について、解答を一緒に渡さないで欲しいです。考える力、調べる力を付けさせたいと思っています。（1年）
- 週に1回だけでもいいので、補習授業があるといいと思います。（2年）

- 学校を信用して子どもを託しておりますが、基礎的・基本的な部分が定着していないのが残念です。家庭でも塾でも補充はやっていこうと思いますが、やはり学校の授業が基本だと思いますので、しっかりお願いします。(1年)

### 3 生徒指導について

- 思春期で大変になってきましたが、学校でも厳しくご指導願います。最近の先生方は少し甘いのではないのでしょうか。(1年)
- 以前に比べ、学校内で生徒とすれ違う時、挨拶をしないように感じます。(3年)
- 生活指導の先生方は、しつこく怒りすぎだと思います。しつこく怒る先生は絶対に嫌われて、子どもも素直になれないと思います。(2年)
- 先生の発言や対応が、横暴すぎるように思います。子どもたちの態度にもよるのかもしれませんが、同じ目線で話してくれる先生が増えたらいいと思います。(2年)
- 先生方の言葉遣いが悪いように思います。特に、生徒を叱る時に傷つく言葉を使っているようですので気をつけていただきたいです。(2年)
- スマートフォンの使用にはいろいろと問題もあると思うのですが、家庭では完全に把握しきれない部分もあります。校則でスマートフォンの使用を禁止していただけると、問題もなくなると思っています。(3年)
- キッズ携帯(見守り携帯)くらいなら、防犯ブザー代わりにもなるので持たせても良いのではないのでしょうか。(1年)
- 学校周辺の細い道路で、横三人並んで歩いていたり、自転車で一旦停止せずに横断する光景を目にします。(3年)
- 暗闇での帰宅がとても心配です。(1年)
- 部活動での練習試合等、保護者の送迎が多すぎるように思います。小学校でのスポーツ少年団での活動と変わりません。(1年)
- 次年度のクラス替えに不安を持っています。特に女子は、いじめや中傷の言葉も増えてくると思っていますので対策をしていただきたいです。個人面談により、要望や相談に乗ってやって欲しいと思います。(1年)
- 中学生ともなれば親もなかなか子供の行動に目が届かないことも多いですが、夜遅くに外出したりすることに寛容な保護者がいることに驚きました。先生方だけでなく、保護者も子供ともっと向き合ってほしいです。(3年)

### 4 保健安全について

- 給食を、もう少し何とかして欲しいです。(2年)
- 給食があまりおいしくなくて、給食の時間が苦痛のようです。クラスで残食もあると聞いているのもつたいないと思います。(2年)

### 5 庶務管理について

- △教室にエアコンを設置して欲しいです。(3年)
- △今年の夏までには、各教室にエアコンの設備を整えていただきたいです。(2年)
- △校内の公衆電話の数を増やして欲しいです。(1年)

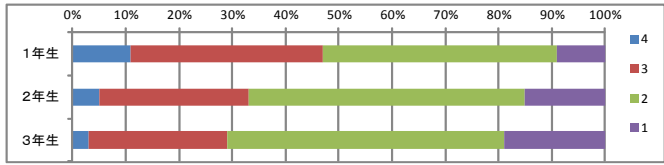
# 生徒学習アンケート調査結果（平成26年7月実施）

## ○学習アンケート

1 あなたは勉強が好きですか

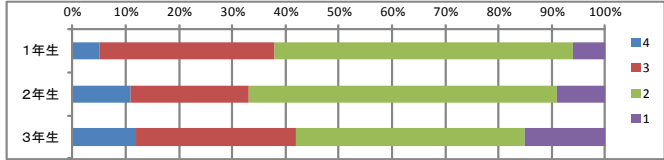
数字は%

	4 とても好き	3 まあ好き	2 あまり好きでない	1 まったく好きでない
1年生	11	36	44	9
2年生	5	28	52	15
3年生	3	26	52	19



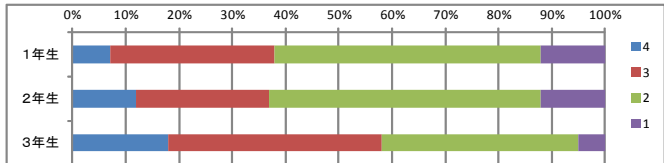
2 平日の勉強時間はどれくらいですか

	4 2時間以上	3 1~2時間	2 1時間以内	1 ほとんどしない
1年生	5	33	56	6
2年生	11	22	58	9
3年生	12	30	43	15



3 休日の勉強時間はどれくらいですか

	4 2時間以上	3 1~2時間	2 1時間以内	1 ほとんどしない
1年生	7	31	50	12
2年生	12	25	51	12
3年生	18	40	37	5

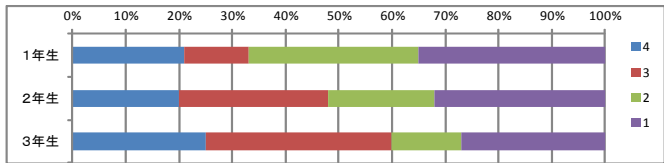


4 あなたは、家庭学習を行うとき、どんな内容を行いますか。

	宿題と塾や家庭教師の課題と自分で考えた内容	宿題と塾や家庭教師の課題	塾や家庭教師の課題のみ	宿題と自分で考えた内容	宿題のみ	ほとんどしない
1年生	5	18	15	16	40	6
2年生	9	16	10	21	35	9
3年生	12	15	8	31	19	15

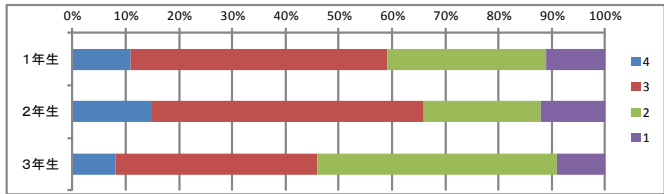
5 あなたは、家庭学習を行う時、最も参考にすることは何ですか？

	4 参考書・問題・など	3 塾や家庭教師の課題	2 学校からのプリント	1 先生の話
1年生	21	12	32	35
2年生	20	28	20	32
3年生	25	35	13	27



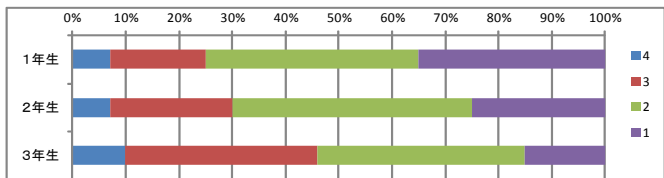
6 あなたは、家庭学習を進めていく上で、何があったら効果的だと思いますか。

	4 宿題の量を増やす	3 学校から勉強の仕方を知る	2 塾や家庭教師からの指導を増やす	1 先生・保護者からの励まし
1年生	11	48	30	11
2年生	15	51	22	12
3年生	8	38	45	9



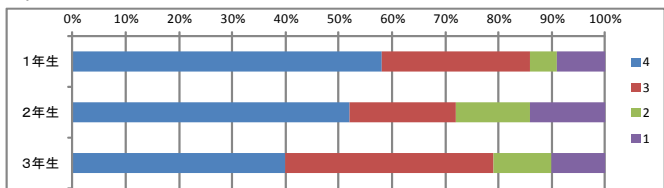
7 平日、テレビやDVD・ビデオを1日にどれくらい見ていますか。

	4 30分未満	3 30~60分	2 60~120分	1 120分以上
1年生	7	18	40	35
2年生	7	23	45	25
3年生	10	36	39	15



8 平日、スマートフォンやタブレットでSNSやメールをどれくらいしていますか。

	4 していない	3 60分未満	2 60~120分	1 120分以上
1年生	58	28	5	9
2年生	52	20	14	14
3年生	40	39	11	10

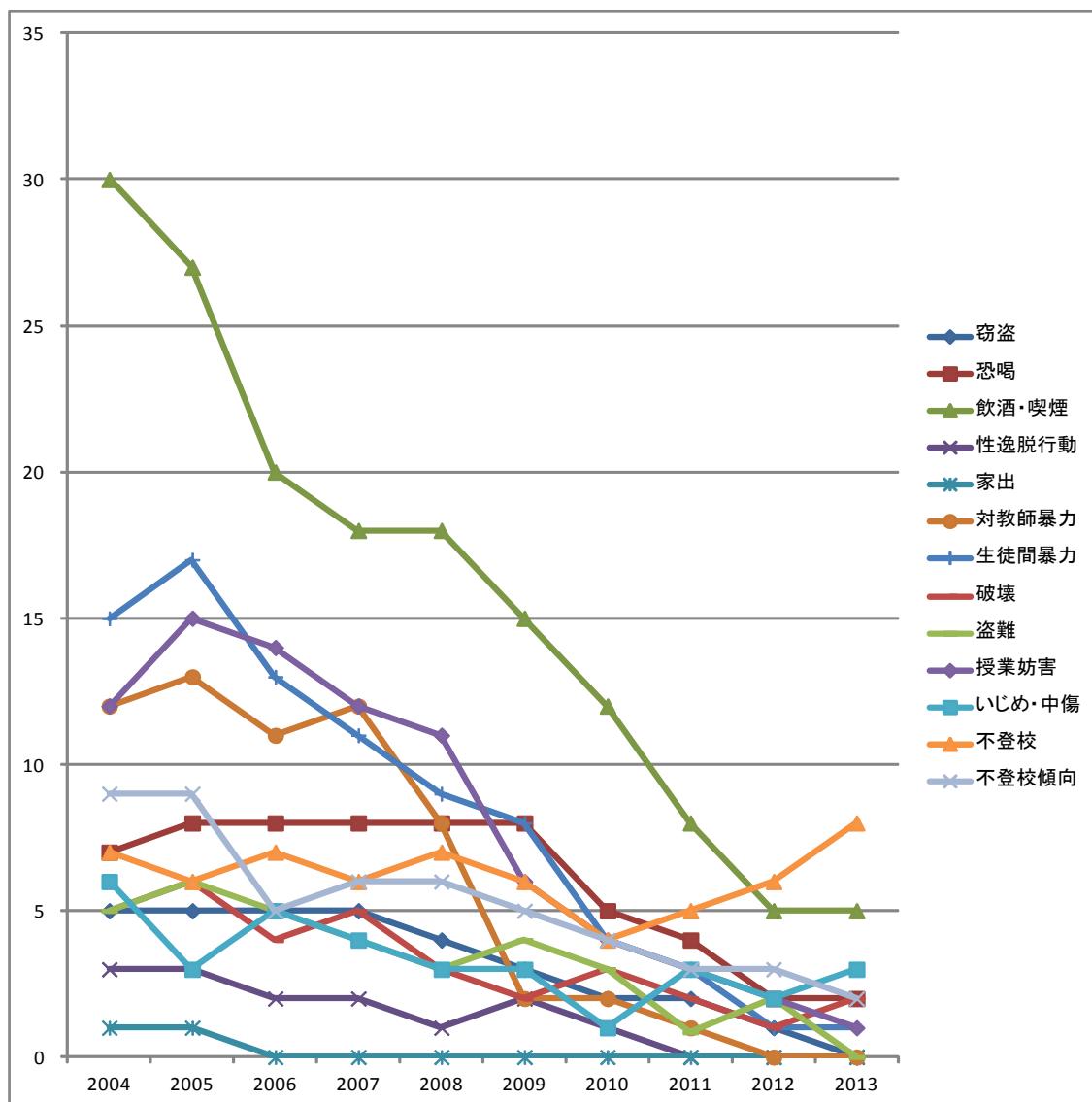




# 問題行動統計

## ○問題行動の推移

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
窃盗	5	5	5	5	4	3	2	2	1	0
恐喝	7	8	8	8	8	8	5	4	2	2
飲酒・喫煙	30	27	20	18	18	15	12	8	5	5
性逸脱行動	3	3	2	2	1	2	1	0	0	0
家出	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
対教師暴力	12	13	11	12	8	2	2	1	0	0
生徒間暴力	15	17	13	11	9	8	4	3	1	1
破壊	5	6	4	5	3	2	3	2	1	2
盗難	5	6	5	4	3	4	3	1	2	0
授業妨害	12	15	14	12	11	6	4	3	2	1
いじめ・中傷	6	3	5	4	3	3	1	3	2	3
不登校	7	6	7	6	7	6	4	5	6	8
不登校傾向	9	9	5	6	6	5	4	3	3	2



## 主な指導部の今年度前期の実態（各主任からの聞き取りより）

### 1. 学習指導部

○目指す生徒像 ・各教科の実態に合わせて授業に学び合い活動を取り入れ、一斉指導・講義形式の授業からの脱却を進め、主体的に学ぶ生徒の姿を目指す。
○具体的実践内容 ・各教科の年間指導計画の中に学び合い活動を位置づけ、全教科、全学年で話し合い活動の充実に取り組む。
○成果 ・全教科で学び合い活動に取り組んだことにより、生徒のかかわりの質の向上が見られ始めている。 ・教科部内の情報交換が行われ、教師同士が互いに高めあえる姿が見えつつある。
●課題 ・本校が目指す学び合い活動の定義があいまいで、単なる話し合いに終わっている授業が多い。 ・教科担任の力量差が大きく、学び合いが形式的に終わり、内容の深まりが足りない授業が見られる。 ・これまでの自分の授業スタイルから脱却することができず、学び合い活動を取り入れることに消極的な教科担任が一部に見られる。

### 2. 生徒指導部

○目指す生徒像 ・基本的な生活習慣が定着し、自律的に規律正しい生活を実践できる生徒。
○具体的実践内容 ・全クラスで生活ノートの記入及び点検を行い、自らの生活を振り返り、律していく習慣を身につけさせる。
○成果 ・一時の荒れた状況から脱し、全体的に落ち着いて生活している生徒が多い。 ・生活ノートへの取り組みが定着し、ほとんどの生徒が自らの生活を振り返る習慣が身に付きつつある。
●課題 ・教師一人ひとりの力量差や意欲の差が大きく、生活ノートが形式的になったり、徐々に提出する生徒が少なくなってもそのままにしておくなど、学級による差が大きい。 ・一部に、「生徒指導＝強い指導」と捉えている教員がおり、行動の背景にあることに目を向けず、威圧的な指導で終わっている場合がある。 ・生徒の問題行動に遭遇してもその場で注意できず、他の教員の力を借りることでしか指導できない教員が少数ではあるが存在する。

### 3. 進路学習部

○目指す生徒像 ・自らの生き方について真剣に考え、積極的に自らの進路について情報を集め、正しい判断をしていこうとする生徒
○具体的実践内容 ・3学年を通した進路指導計画を基に、各学年の実態に応じた進路指導を計画的・継続的に行っていく。
○成果 ・各学年の進路指導担当の指導のもと、計画的に進路学習の授業が展開されている。
●課題 ・3年生になると進学指導が中心となり、生き方指導の部分が弱まっている。 ・地域の企業・商店等で行う職業体験が定着しているが、体験学習が単発で終わり、自らの進路にどう生かすのかが不明確である。 ・学級担任の力量差により、進路学習の深まりに差が出ている。

### 4. 特別活動部

○目指す生徒像 ・行事等への取組で、積極的に自らのよさを生かして集団に関わろうとする生徒。
○具体的実践内容 ・3学年を通した特別活動計画を基に、各学年の実態に応じた指導を計画的・継続的に行っていく。
○成果 ・学年の進路指導担当の指導のもと、計画的に特別活動への取組が展開されている。
●課題 ・一つ一つの行事が単発で終わり、3年間を通した学びの高まりや深まりにつながっていない。 ・学年間の交流が不十分で、下級生が上級生を目指す姿や、上級生が下級生をリードしていく姿がまだまだ不十分である。

### 5. 教務部

○具体的実践内容 ・生徒及び教職員が、見通しを持って活動に取り組めるよう、先を見通した提案を年間を通して行う。
○成果 ・例年通りの活動については、早めの提案を行うことができ、見通しをもった取組につながっている。
●課題 ・新たな提案を行うことができず、前年踏襲の維持がやっとなのである。



■「自分が朝日南中学校の校長だったら今後何に取り組むか」を以下に記入してください

A large empty rectangular box provided for writing the response to the prompt.



■付箋貼付スペース

Blank space for sticky notes.

■気づいたこと

自分の特徴

上記の特徴が周囲に与えている影響



# 【情報収集】 ケース演習② 振り返りシート

## 【振り返りの進め方】

1. 左表に従って、自分が収集した情報を情報領域ごとに分類し、収集数を記入する。収集数を記入後、上位3項目に○、下位3項目に×をつける。
2. 一覧表で記入した付箋を、右表の貼付スペースに貼り付ける。
3. 左表と、付箋を見た上で、自分の情報収集の特徴とその特徴が出る理由を考え、右表「気づいたこと」の欄に記入する。

氏名： \_\_\_\_\_

情報領域	情報の内容（代表例）	収集数	○ / ×
児童・生徒	児童・生徒の実態（学力面・体力面・生活面・卒業後の進路の状況・学校満足度等）		
教職員	教職員の実態（よさや課題 特別な配慮を要する教職員の状況 同一校長期勤務者） 関係団体・機関との関係 学校教育への期待・願い		
保護者	保護者の実態（要保護・要保護の世帯数） 学校納付金の集金状況（未納、滞納状況） 学校沿革・通学区域（通学距離・通学方法）		
学校	自校の特色や課題（子どもの人口の推移 入学予定者数 不登校・いじめ・問題行動の発生率 特別な支援を要する子どもの数 短期・中期的課題に関する取組の現状 等） 自校の教育目標 目指す学校像、生徒・児童像、教師像 重点目標 重点活動 教育課程 各分掌のまとめ・振り返り 等 教育予算の現状（学年教材費会計報告 学年預金会計報告 PTA会計報告 積立金（修学旅行）会計報告 その他会計報告 等） 教育施設の利用状況および条件整備 幼保・小・中・高の連携 施設・設備の管理		
地域	地域の学校に対する期待・願い（求める子ども像、学校像） 地域の課題（教育・産業・経済・文化・人口の推移・高齢化率） 地域のもつ教育的資源（人的資源、歴史・文化的資源 等） 教育委員会（教育長）の方針（重点施策 等） 各種規則（管理規則等）の確認 前年度の重点施策の評価（成果、課題、達成度等） 市内の学校の状況 施設管理（耐震状況等）		
市町村教委（教育長）	首長の教育への思い・願い、方針、施策 国の教育の動向（基本的方向性・成果目標・基本施策 等） （中教審審員）（教育再生実行委）（教育連携基本計画） 国の教育予算 都道府県教委の教育方針・重点施策 人等（加配 等） 議会 社会教育団体 警察・児童相談所・福祉部局 大学・研究機関等からの情報 近隣の校長との情報交換		
首長			
国			
都道府県教委			
外部機関			
その他			

付箋貼付スペース

### ■気づいたこと

自分の情報収集の特徴

上記の特徴が出る理由

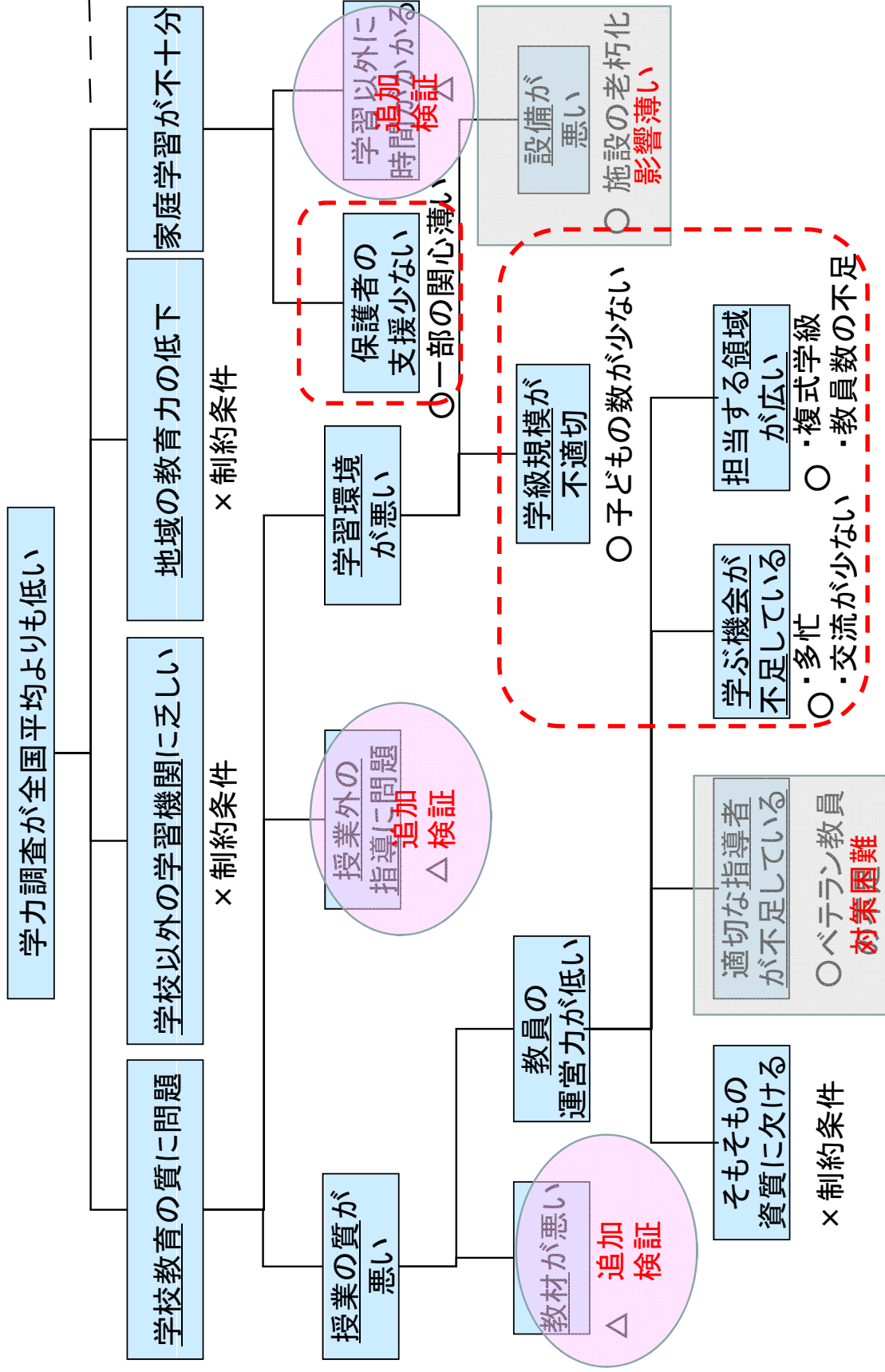
ケース演習2

情報収集シート(代表例)

現状を把握するための必要な情報内容		情報の入手方法(どのようにその情報を得るか)
児童・生徒	児童・生徒の実態(学力面・体力面・生活面・卒業後の進路の状況・学校満足度等)	○前校長との引継ぎ ○全国学力学習状況調査の分析 ○全国体カテリストの分析 ○学校評価 ○地域(住民)へのアンケート調査 ○授業参観(校内巡視) ○職員会議、校内研修 ○子どもからの聞き取り(アンケート、校長室開放等)
教職員	教職員の実態(よさや課題 特別な配慮を要する教職員の状況 同一校長期勤務者) 関係団体・機関との関係	○前校長との引継ぎ ○授業観察(校内巡視) ○児童・生徒の声 ○保護者の声 ○教職員へのアンケート調査 ○面談 ○関係団体・機関との話し合い ○生徒(教職員)による授業評価
保護者	学校教育への期待・願い 保護者の実態(要保護・準要保護の世帯数) 学校納付金の集金状況(未納、滞納状況)	○前校長との引継ぎ ○PTA会長および役員との意見交換 ○学校評価アンケート ○PTA総会(議事録) ○保護者面談(学校行事参加時も含む) ○学年PTA ○学級懇談会 ○地区懇談会
学校	学校沿革・通学区(通学距離・通学方法) 自校の特色や課題(子ども人口の推移 入学予定者数 不登校・いじめ・問題行動の発生率 特別な支援を要する子ども数 短期・中期的課題に関する取組の現状 等) 自校の教育目標 目指す学校像、生徒・児童像、教師像 重点目標 重点活動 教育課程 各分掌のまとめ・振り返り 等 学校財務(学校予算 学年教材費会計報告 学年預金会計報告 PTA会計報告 積立金(修学旅行)会計報告 その他会計報告 等) 教育施設の利用状況および条件整備	○学校沿革史 ○担当教職員からの聞き取り ○前校長との引継ぎ ○ホームページ ○学校便り ○学校評価 ○統計データ ○関係機関との意見交換 ○教職員からの聞き取り ○校内児童生徒理解の会 ○学校関係者評価委員会 ○保幼小中連絡会議
地域	地域の学校に対する期待・願い(求める子ども像、学校像) 地域の課題(教育・産業・経済・文化・人口の推移・高齢化率) 地域のもつ教育的資源(人的資源、歴史・文化的資源 等)	○前校長との引継ぎ ○学校要覧・教育計画 ○学校経営計画 ○教育課程年間指導計画 ○自治会行事への参加 ○近隣校の校長からの聞き取り ○学校運営協議会の議事録 ○教職員によるSWOT分析 ○学校経営目標を確認する校内研修 ○分掌・学年による報告会
市町村教委(教育長)	各種規則(管理規則等)の確認 前年度の重点施策の評価(成果、課題、達成度等) 市内の学校の状況 施設管理(耐震状況等) 首長の教育への思い・願い、方針、施策 国の教育の動向(基本的方向性・成果目標・基本施策 等) (中教審答申)(教育再生実行会議)(教育振興基本計画) 国の教育予算	○各教職員からの聞き取り ○施設安全点検記録簿 ○学校訪問 ○前任者からの引き継ぎ ○教育委員会事務局との意見交換 ○校区内の校(園)長からの聞き取り ○事務職員からの聞き取り(共同実施) ○連携研修や行事の開催 ○校区内校長会聞き取り ○環境整備計画 ○防火・防災管理計画 ○事務職員からの聞き取り ○安全点検 ○学校保管のデータ
都道府県教委	都道府県教委の教育方針・重点施策 人事(加配 等)	○地域(住民)へのアンケート調査 ○地域(住民)との意見交換(地区懇談会) ○自治会長(民生委員)との会合 ○学校評価 ○学校評議委員会 ○自治会行事への参加 ○近隣校の校長からの聞き取り ○学校公開日の活用 ○地域の諸会議(○学校運営協議会) ○小中、中高連携協議会 ○社 会教育担当者との懇談 ○同窓会役員との会合 ○保護者会、PTA会議での聞き取り ○教 職員からの聞き取り ○学校開放、学校と地域行事の共催 ○企業訪問 ○学校関係者評価委員 会 ○統計データ ○ホームページ ○コミュニティ・スクール
外部機関	警察・児童相談所・福祉部局 大学・研究機関等からの情報	○市町村教育委員会作成の教育振興基本計画 ○教育長との懇談 ○校長研修等での教育長の講 話や事務局からの連絡事項等 ○校長会議の出席 ○各種規則(管理規則等) ○教育委員会の点検評価報告書 ○校長意見交換会 ○教育委員会事務局からの聞き取り ○マニフェスト ○議会答弁 ○文部科学省ホームページ ○中教審の議事録 ○校長研修会 ○教育法規 ○各種新聞
その他	近隣の校長との情報交換	○都道府県教育委員会作成の教育振興基本計画 ○教育行政方針(説明書等) ○県主催の各種行事への参加 ○校長ヒアリング ○学校運営協議会からの人事に関する意見 ○議会の傍聴 ○社会教育団体(公民館等)との情報交換会 ○各種関係機関との情報交換会 ○訪問による情報交換 ○教育委員会事務局からの聞き取り ○国立教育政策研究所ホームページ ○マスコミ関係 ○大学関係者との連携(HP活用、各種会議) ○他県教育センターのホームページ ○他県教育センターのHP



# ツリー作成例





問い： ツリヤーをつかって問題分析をしてください。またその真因も特定し、その根拠も含めてお答えください

全国学力・学習状況調査の結果が全国平均よりも低い

原因  
の分析

真の原因  
の特定



氏名:

---

■付箋貼付スペース

■気づいたこと

自分の思考特徴

「分析」で学んだことをどのような場面で応用できそうか

## 【分析】原因分析の留意点

「原因の分析」ステップで陥りがちな例です。参考にしてください。

### ■ 具体的な事実やデータに基づいていない(推測や思い込みで進めてしまう)

例① 【結果】 授業満足度が下がっている ← 【原因】 授業の質が落ちた

- ✓ 「授業の質が落ちた」という具体的な事実はあるのか？ 推測ではないか？

例② 【結果】 Aシステムの利用率が低い ← 【原因】 Aシステムは使いにくい

- ✓ Aシステムが使いにくいというのは事実か？ 思い込みや決め付けはないか？

### ■ 一つの原因に2つ以上の要素を含めてしまう

例① 【結果】 Bグループの残業が多い ← 【原因】 Bグループの仕事量が多く、人が足りていない

- ✓ 仕事の量が多いことと、人員が不足していることは、それぞれ別の原因として掘り下げる

例② 【結果】 Cエリアの学力が低下している ← 【原因】 教員が忙しく、職場にまとまりがない

- ✓ 営業が忙しいことと、チームにまとまりがないことは、それぞれ別の原因として掘り下げる

### ■ 結果←原因の関係になっていない(逆も成り立ってしまう)

例① 【結果】 仕事ができるようにならない ← 【原因】 仕事へのモチベーションが上がらない

- ✓ 仕事へのモチベーションが上がらない ← 仕事ができるようにならない と、逆も成り立ってしまい、「原因」とはいえない

### ■ 結果←原因の関係に飛躍がある

例① 【結果】 外出先で雨に降られ濡れてしまった ← 【原因】 天気予報で今日は晴れだと言っていた

- ✓ 雨に濡れた (←傘を持っていなかった) ← 天気予報が晴れだった

例② 【結果】 新人が育たない ← 【原因】 先輩が忙しい

- ✓ 新人が育たない (←先輩が新人指導に割く時間を取っていない) ← 先輩が忙しい

### ■ 原因を抽象化してしまう

例① 【結果】 若手のモチベーションが低下している ← 【原因】 マネジメントが機能していない

例② 【結果】 文部科学省に提出した書類にミスがあった ← 【原因】 仕事の能力が低い

- ✓ 抽象化してしまうと、原因が大きくなりすぎ、手の打ちようがなくなってしまう

## 【構想】 ワークシート① ～ケース演習 ワークシート～

### 目的(実現したい姿)

- 全体状況を見据え、あなたは校長として、朝日南中学校の教育において、どのような姿を実現しますか？

### 目標

- 上記の姿を実現するために、何を目標として設定しますか？最大5つ以内で設定してください。

氏名

- 目的(実現したい姿)と目標を設定した根拠を記入してください(「何故この目的と目標を設定したのか?」と関係者から聞かれた際に、相手を納得させられるように整理しておくこと)

【構想】 ワークシート③ ～ケース演習 振り返りシート～

■自らの着眼点の特徴(A3のワークシート②を確認してください)

情報領域	国・県の 方針	自治体の 方針	民意	自治体、 校区の 現状	環境変化	自分の 教育観
収集したか (○/×)						
重視度 (高/低)						

■自分の特徴について気づいたこと

自分の思考特徴や行動特徴(良い面・悪い面)

上記の特徴が何故出るか

上記の特徴が現実に応どんな影響を与えているか(良い面・悪い面)

氏名

(1)自治体、校区の現状

●自治体、校区には教育上どのような資源(強み)があるか？

●自治体、校区が抱えている教育上の大きな問題は何か？

(2)外部環境の変化

●教育を取り巻く環境が今後どのように変化するか？(政治/経済/社会/技術)

●上記が自治体、校区にどのような影響を及ぼすか？(ポジティブ/ネガティブ)

(6)私の教育観

●どういう大人に育てるべきか？

■上記の理由は何か？

●そのために、どのような教育が求められるか？

(3)国・都道府県の教育方針

●国の教育方針は何か？

●都道府県教育委員会の方針は何か？

(4)自治体の方針

●自治体が出している方針(総合計画)を実現する上で、教育に求められることは何か？

●首長のマニフェストを実現する上で、教育に求められることは何か？

(5)民意

●住民が教育に求めていることは何か？



## 【構想】 全体発表の進め方

### ①発表について

時間は7分です

#### ■ 聞き手に納得・共感してもらい、ありがたい姿を支持してもらうことをゴールにしてください

- ・発表の形式は自由ですが、「実現したい状態」と「目標」、「考えた理由」については必ず説明してください。
- ・時間が来ましたら、途中でも中断します。

### ②質問について

時間は5分です

#### ■ 関係者の立場に立って質問してください

質問する際に「保護者の〇〇ですが・・・」など、関係者の立場になって質問してください。

#### ◇質問の観点例

- 教育長：「教育委員会の方針と整合性がとれているか？」
- 校区小学校長：「掲げられた内容が現実と大きなギャップがないか？」
- 保護者：「書かれている内容が具体的にイメージできるか？」
- 地域住民：「ありがたい姿が実現することで、地域にとってのメリットがあるか？」

#### ■ 具体的な施策については、質問しないでください

- × 「具体的にどんな施策を展開するのですか？」
- 「その目標に書かれている〇〇とは、具体的にどういう結果を出すことですか？」

### ③フィードバックについて

時間は3分です


#### ■ 付箋に「発表の良かった点・気になった点」を記入してください ※お名前は不要です

- ・黄色の付箋に「良かった点」、ピンク色の付箋に「気になった点・改善点」をご記入ください。
- ・付箋には「発表した内容」と「発表の仕方・伝え方」の両方、もしくはいずれかについてご記入ください

#### ■ 記入し終わったら、発表グループの模造紙に貼り付けてください

執筆者（順不同）

日渡 円	兵庫教育大学
小西 哲也	兵庫教育大学
諏訪 英広	兵庫教育大学
葛西 耕介	兵庫教育大学
三田村 彰	福井大学大学院
押田 貴久	宮崎大学大学院
川口 有美子	公立鳥取環境大学
桑原 鉄次	長崎県教育センター
稲垣 健	神戸市総合教育センター
佐藤 大輔	函館市教育委員会
小和田 和義	福井県教育研究所
澄川 忠男	下関市教育委員会
西井 直子	三重県教育委員会
池田 浩	新潟市教育委員会
鈴木 淳	北海道立教育研究所
谷口 史子	宮崎県延岡市立旭中学校
西山 由花子	岡山県久米南町立久米南中学校

国立大学法人  
 兵庫教育大学

平成 27 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業  
実施テーマ：管理職を養成する仕組みの確立

**新しい時代に対応する学校管理職マネジメント研修に係る研究報告書**

**編集**

新しい時代に対応する学校管理職マネジメント研修に係る研究会

**発行**

国立大学法人 兵庫教育大学

平成 28 年 3 月 15 日発行

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、《受託者の名称》が実施した平成 27 年度「総合的な教師力向上のため調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。